



第15回

川に学ぶ体験活動

全国大会in尻別川

テーマ: 新たな河川文化の創造

報告書

日時: 2015 年(平成 27 年)9 月 26 日(土)・27 日(日)

メイン会場: 北海道虻田郡ニセコ町富士見 95 ニセコ町民センター

主催: 第 15 回川に学ぶ体験活動全国大会in尻別川実行委員会

共催: NPO法人川に学ぶ体験活動協議会、NPO法人しりべつリバーネット、
ランコ・ウシ尻別川河川愛護の会



Our Life, with River
河川整備基金

公益財団法人河川財団による
河川整備基金の助成を受けています

この写真はカヌーツーリング撮影: 半澤伸夫氏

目 次

■ 本編

1. 開催の趣旨	2
2. プログラム	
3. 受付（参加状況等）	3
4. 開会式	4
1) 主催者挨拶	
2) 開催地歓迎挨拶	5
3) 来賓挨拶	6
5. 基調講演「新しい北海道の河川文化とは」	9
6. 活動報告（10団体）	10
1) 倶知安町立東小学校（北海道）	
2) 手稲さと川探検隊（北海道）	
3) NPO法人みずのとらベル隊（熊本県）	11
4) NPO法人まち・川づくりサポートセンター（北海道）	13
5) ハサンベツ里山計画実行委員会（北海道）	
6) 日野川流域交流会（福井県）	14
7) 東予環境グループ（愛媛県）	
8) 尻別川の未来を考える「オビラメの会」（北海道）	15
9) 一般社団法人流域生態研究所（北海道）	16
10) 河川愛護団体 リバーネット 21 ながぬま（北海道）	17
7. 分科会	19
1) 第1分科会 進化する川遊び	
2) 第2分科会 川遊び指導者はなぜ育たないのか	
3) 第3分科会 身近な川の防災	20
8. 分科会報告、全体会	21
9. 閉会式	28
10. 交流会	29
11. エクスカーション	32
1) カヌーツーリング（於：尻別川蘭越町）	
2) 鮭遡上ウォッチング（於：尻別川支川目名川蘭越町）	34
3) ラフティング（於：尻別川ニセコ町）	36

■ 資料編

1. 議事録、講演内容詳細（i 基調講演、ii 分科会）	37
2. 実行委員会・運営委員会・事務局名簿及び会議開催状況	49
3. 当日配布プログラム及びパネル展等会場展示状況	54

1. 開催の趣旨

北海道では初となる川に学ぶ体験活動全国大会を尻別川流域のニセコ町で開催しました。尻別川は、北海道南西部のフレ岳から日本海に注ぐ全長126kmの一級河川で、5年連続通算13回水質日本一に輝く清流です。この川は、アユやサクラマス、サケに加え、国内最大の淡水魚であるイトウも生息する豊かな自然環境を有しています。このほか、尻別川は北海道の河川の間では人とのかかわりも深く、カヌーやラフティング、釣りなどのアウトドア活動においても北海道屈指のフィールドとして知名度が高い河川です。さらに近年では、水辺の楽校や清掃活動、水質調査などの環境教育や、防災活動等の市民活動も活発となり、新たな河川文化が育っています。

このたび、その尻別川を舞台に川に学ぶ社会づくりを推進するため、「新たな河川文化の創造」をテーマに全国の川で活動している団体が一堂に集い、川との関わり方の共有や豊かな川文化の創造を目指しました。

2. プログラム

・ 1日目 9月26日（土） 町民センター
 12:00 受付
 12:30 開会式
 13:00 基調講演
 14:10 活動報告
 16:00 分科会
 17:30 分科会報告、全大会、閉会式
 18:30 交流会

・ 2日目 9月27日（日） 尻別川ほか
 8:45 エクスカーション
 ・ カヌーツーリング
 ・ 鮭遡上ウォッチング
 ・ ラフティング
 12:00 解散

2015.09

3. 受付 12:00～

受付は会場玄関付近のブラウジングコーナーで、本大会における基調講演、活動報告、分科会、交流会、エクスカーションの参加人数の確認及び参加料徴収を行いました。

参加人数は事前申し込み者の他、当日の参加者や運営スタッフを含め、当初予定を大幅に上回る人数でした。

- ・ 総参加人数（スタッフ含む） 319人
（大ホール：開会式、基調講演、活動報告）
- ・ 第1分科会（研修室2） 39人
- ・ 第2分科会（白樺（和室）） 31人
- ・ 第3分科会（研修室1） 56人
- ・ 分科会報告、全大会、閉会式 88人
- ・ 交流会（大ホール） 174人
- ・ カヌーツーリング 40人
- ・ ラフティング 43人
- ・ 鮭遡上ウォッチング 27人

受付の状況



受付にてプログラム、尻別川PRCD、パンフレットなどの配布



受付横のセンターホールでは、地元ニセコ町商工会による地酒などの物産展、北海道環境財団の書籍販売、河川財団PRコーナーを設け好評を得ました。

また、小ホール（132㎡）では、北海道開発局や北海道からの河川管理の啓発パネル展示や北海道各地域で活動しているNPO法人等からの河川環境活動パネル展示を行い、大勢の来場者で賑わいました。

＜物産展、書籍販売、啓蒙パネル展の実施状況写真は資料編3に掲載する。＞

4. 開会式

12:30～

本大会には、NPO法人川に学ぶ体験活動協議会代表理事、国土交通省水管理・国土保全局河川環境課長代理、北海道知事代理、尻別川連絡協議会構成員の蘭越町長、ニセコ町長、京極町長、倶知安町長、喜茂別町長、真狩村長、留寿都村長、北海道開発局河川計画課長、小樽開発建設部長、北海道後志総合振興局長や経済団体の各界からのご臨席を賜り開催されました。



1) 開会挨拶：司会進行

しりべつりバーネット理事 佐藤義久 氏



本日はお忙しいところ、蝦夷富士とも呼ばれております、羊蹄山の麓、清流日本一の尻別川の流れる北海道、ここニセコ町にお越しいただきまことにありがとうございます。

ただいまより第15回川に学ぶ体験活動全国大会 in 尻別川を開催いたします。

2) 主催者挨拶：大会実行委員長

牧野純二 氏（しりべつりバーネット理事長）

第15回川に学ぶ体験活動全国大会 in 尻別川を開催にあたり実行委員を代表し、私から一言ご挨拶をさせていただきます。

本日は、道内はもとより全国各地から多くの皆様に蝦夷富

士羊蹄山のふもとを流れる尻別川の地ニセコにお越しいただき感謝申し上げます。RACが設立されてから河川環境を場としている道内の河川団体は川を理解し川に学ぶ理念を共有し様々な河川活動を各地で展開してきた。そして本日は全国大会を尻別川流域で開催できることを大変感慨深く思います。私たちの活動エリアであるニセコ羊蹄を流れる尻別川は5年連続通算で13回の1級河川水質日本1位に輝き、国内最大の淡水魚「イトウ」と北限に近いアユが共存する自然豊かな河川環境で、春はサクラマスが遡上し、夏はカヌーやラフティング、釣りなどのアウトドア活動が盛んに行われ、秋には鮭も遡



上する川です。流域の7町村の昨年度の観光利用客が930万人を超え、環境支援の観光化が進み、道内では川とのかかわりが強い地域でもある。河川環境の保全と再生が流域社会にとって重要事項として認識され、流域7町村による尻別川統一条例の制定、水辺の楽校や河川清掃、水質調査など環境保全活動、防災教育等が市民活動により実施もされて新しい河川文化が育ちつつあります。この尻別川で新たな河川文化の創造ということをテーマに、全国で活動している団体が集まり、各地での川との関わり方を共有し豊かな河川文化の創造に繋がる大会を行うことは、流域社会の未来に繋がると確信としています。

関係各位の皆様にご心より感謝を致します。

NPO法人川に学ぶ体験活動協議会代表理事 久住時男 氏

こんにちは、ニセコに多くの仲間がお集まりいただきありがとうございます。

私はRACの代表理事を務めています。仕事としては新潟県見附市で市長を担っています。



これだけ多くの方が集まって河川文化の創造をテーマに開催するものであります。1999年に河川法が改正されて防災や環境を取り入れた「川に学ぶ」という国づくりの支援する体制で立ち上がった組織であります。そのために各地でいろんな活動が進んでいるそれを全国的に支えている会です。各地でいろんな活動が立ち上がっています。それを支える活動もしています。最近の話をしますと、先日も北関東で大水害が起きました。自分は13年前に市

長になったが市長になって2年後に見附市も大きな水害に見舞われた。そのような体験を含めていざという時に自分達はどのように身を守るのか？命を守るかなど、プロフェッショナル的な人材を増やそうと、子どもたちに河川の豊かさを伝えられる学び指導者を育成する団体です。

今は川の指導者であるリーダーが約3,500人、インタラクターが約500人、トレーナーが約60人、川の指導者認定の唯一の組織です。

年1回、全国各地から集まって、各地の事例発表、知恵を交換して学びあって持ち帰って事案を検討する。RACが出来上がった当初は北海道の地域の方々が活躍をしておりました。いつか北海道で全国大会をと念願でありました。日本で最もきれいな尻別川、そして7市町村の首長の方々など、地域連携が河川の大きな役割であり、先進地である尻別川を含めて北海道で全国大会を行えるのはこの上もない喜びです。是非、これからの二日間学びあって親睦を深めて全国の自治体の全てのふるさと、川のまちづくりに取り込んでいただければと思います。

最後に、7名の首長さんへのお礼を含め、関係者の皆様にも大変感謝を申し上げます。

3) 開催地歓迎挨拶 尻別川連絡協議会会長・蘭越町長 宮谷内留雄 氏

尻別川連絡協議会の会長を賜っております、蘭越町長の宮内と申します。

9月も下旬となりニセコの山々も紅葉が始まっておりますが、この大会はここ尻別川流域及びこの地で開催されること



は流域に住む私どもにとって大きな喜びであり、開催地として心からご歓迎を申し上げる次第であります。

さて、私達はこの尻別川を母なる川と呼んでいますが、それは流域に暮す私達に実に大きな恵みをもたらしてくれています。有史以来、幾度と無く繰り返して来た川の氾濫も流域に肥沃な平野をもたらし、わが国の食料危機である北海道農業の一翼を担う当地も繁栄に寄与するものであります。秀峰羊蹄山の麓にあります流域7町村は平成7年に尻別川連絡協議会を設立し、尻別川の水質と景観を守り、人と自然との共生を目指す取り組みをしています。

設立当初は流域の住民に川の大切さや川への関心を高めていただくために尻別川フォーラムを長く開催してきました。今ではそれぞれの町で川の清掃活動や水質調査、環境学習など、さらには水防訓練や水辺のイベントなど川をフィールドとした活動が盛んに行われるようになりました。また、平成18年には協議会の構成7町村で河川保全に関する統一条例を制定し、それぞれの町に流れる美しく豊かな川の流域全体を共有財産として守っていくことを宣言しました。

このように流域に暮す私達は水辺のある暮らしを取り戻し、ここに住んでいることに愛着と誇りを持つという心意気で尻別川を初めとする川と向き合っております。

そんな中で今回、全国で川に学ぶ体験活動を行なっている多くの団体や関係者が集い、各地の体験活動を共有し、豊かな川文化に創造に繋げる大会がここ尻別川流域で開催されることは大変有意義であります。この大会の開催に関わった関係者の皆様には心より感謝を申し上げます。ご尽力いただきました関係者に敬意と感謝を申し上げますと共に大会の成功と皆様の旅路の

平安をご祈念して、地元開催地の歓迎の挨拶とさせていただきます。

4) 来賓挨拶【祝 辞】

国土交通省水管理・国土保全局水管理部河川環境課長

小俣 篤様 代理

河川環境評価分析官 三橋さゆり 様

みなさんこんにちは、国土交通省の三橋と申します。本来であれば、河川環境課長の小俣が参りまして、ご挨拶する予定でしたが、急遽出席ができなくなってしまいました。小俣からの言葉を預かってまいりましたので、私から代わりにお知らせいたします。



「本日、第15回川に学ぶ体験活動全国大会が、北海道の尻別川という大変美しい自然に囲まれたこのニセコの地で、盛大に開催されますことを心からお慶び申し上げます。また、日頃から皆様には、河川環境行政につきまして、多大なご協力ご支援を賜り、厚く御礼を申し上げます。

ご承知の通り、我が国は大変美しい山野に囲まれ、その素晴らしい自然の恵みを享受できる幸せにあります。川に学ぶ体験活動もそうした恵みの一つであると認識しております。

その一方で、自然の恐ろしさも常に身近にあるのが我が国であり、近年は局地的な集中豪雨が頻発するなど、水害が激化する傾向にあります。先月の台風18号豪雨による関東・東北地方の記録的な大雨は、鬼怒川などで堤防が決壊し甚大な事態が発生しました。

国土交通省においては、事前の情報提供や、被災後の排水、そして災害復旧などに全国から

人員を集結して取り組んでいる所でございます。本日はその関係で、出席することが出来なくなってしまうことをお詫び申し上げます。

また近年、河川における水難事故もまだまだ多く発生しております。このような状況から、国土交通省では、毎年7月1日から7日までを河川水難事故防止週間と位置づけ、またRACにおかれましては、全国一斉一万人川の流れ体験キャンペーンを実施していただいている所ですけれども、今年の夏からは、そこにライジャケオンという、ライフジャケット着用キャンペーンを合わせて実施し、RACの認証制度と連携した活動も行っていました。また来年度も引き続き行っていく所存であります。そうした理解も今後ますますRACの活動が重要になっていくと考えております。

更に、本省においては、今後河川の教育の分野、これは歴史や防災まで幅広くでありますけれども、川について子どもの頃から学んでいける社会を目指して、文部科学省と連携して進めて行こうとしています。

皆様におかれましても、川の指導者育成の立場からご支援ご協力いただければと思います。最後になりましたが、NPO法人しりべつりバーネット牧野会長をはじめ、流域町村の皆様方、それから関係各位に深く敬意を表するとともに、川での自然体験活動を担う皆様方が、ますます発展されますよう祈念を申し上げます。

河川環境課長小俣篤 代読三橋

小俣は参加辞退を大変残念がっておりまして、昨日、来る前に「三橋、よろしくたのむ」と仰せつかって参りました。只今課長からの話にもありましたように、本年からライジャケオンという新しいキャンペーンを取り組んでおりまして、実は昨年宮崎の大会で申し上げたのですが、RACさんの認証制度、それか

らライフジャケットの〇〇さん、河川財団さんそこに国土交通省と文部科学省が後援をすると、そういう形で大きなキャンペーンを始めております。来年度に向けて充実を図っていきたくて思っておりますので、またお知恵をお借りできればと存じます。文部科学省との連携もますます昨年から進んで参りまして、今後様々な取り組みを広げて行きたいと思っておりますので、どうぞ皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

本日は全国大会、本当におめでとうございます。これをもちましてご挨拶とさせていただきます。よろしくお願いいたします。



北海道知事 高橋はるみ様代理

北海道建設部長 名取哲哉 様

みなさんこんにちは、只今ご紹介いただきました、北海道建設部長の名取でございます。本来であれば、高橋はるみ知事がこの場に出席しまして、皆様にお祝いを申し上げますところでございますが、所用の為、出席ができませんでしたので、知事から預かつ



て参りましたメッセージを私から拝読させていただきます。

「本日、第15回川に学ぶ体験活動全国大会 in 尻別川」が多くの皆様のご参加の基、盛大に開催されますこと、心からお喜び申し上げます。

また、川に学ぶ体験活動協議会の皆様には、河川をフィールドにした活動を通して、水環境の保全についての重要性を広く伝えていただくなど、日頃の尽力に深く敬意を表します。北海道で初めて開催される本大会のテーマは、新たな河川文化の創造と伺っております。

川は古くから私たちの日常生活と密接に関係し、季節ごとの行事やお祭りなど、地域の風土を育んできた重要な要素の一つでありました。現在でも自然の豊かさを残す川は、心の原風景として多くの方々の心に触れるものです。

とりわけ北海道には世界自然遺産の知床をはじめ、豊かな自然が多く残されており、中でも川や湖が水と緑と様々な生き物によって優れた自然を構成しております。

一方、先日関東・東北地方では記録的な豪雨が発生し、堤防決壊による災害で家屋や市道が流され尊い人命が失われるなど、甚大な被害が発生したことは誠に痛ましく心からお悔やみとお見舞いを申し上げます。道では安全安心な暮らしを守るための治水対策を推進することはもとより、世界から高く評価されているこの豊かな自然を大切に守り、次の世代にしっかり継承していくこととし、多様な植物が育ち、多くの生き物が棲む、生きている川を目指すものと位置づけ、さらに川づくりを確かなものにするために、人々が参加する川づくりを提唱しております。

こうした中、本大会の開催により、各地で河川を大切にする活動に取り組まれている皆様が一堂に会し、交流を深め、各さまざまな役割についての理解を深められることは、美しい自然

景観の保全につながるものとして大変意義深いものと考えております。

本日ご参加の皆様におかれましては、清流尻別川をはじめ、豊かな自然を堪能いただくとともに、本道の実りの秋を存分に味わっていただければ幸いです。結びになりますが、本大会の盛会と本日お集まりの皆様のご健勝ならびにご活躍を心からご祈念申し上げます、お祝いの言葉といたします。

平成27年9月26日 北海道知事高橋はるみ代読。本日は誠にありがとうございます。



5. 基調講演

13:00~

【演 題】

『新しい北海道の河川文化とは』

【講 師】

株式会社NAC代表 ロス・フィンドレー氏

【講師プロフィール】

オーストラリアの出身ロス・フィンドレー氏は1995年に倶知安町で「NAC ニセコアドベンチャーセンター」を設立。ラフティ



ングなどアウトドアアクティビティのフィールドとして、国内外にニセコ地域や尻別川を広く紹介した立役者です。近年では、一昨年に新たなロードバイク（自転車）の大会をニセコでスタートさせるなど、地域の魅力向上、地域活性化に貢献すべく、常に新しい視点で「楽しさ」を発掘されています。氏は国土交通省より外国人初の観光カリスマにも認定されているほか、現在は一般社団法人ニセコプロモーションボードの代表理事も務められるなど、現在も精力的に活動しています。

【講演概要】

氏が1989年に北海道に来てからの尻別川に対する人々の関わり方の変遷と、アウトドアの移り変わりを紹介。特に、川から人が離れたことにより、今の人たちの川に対する認識が「川

＝怖いもの、危険なもの」になってしまったことなど、人の川に対する意識も変わってきた印象などを話されました。

また、冬のスキーだけでなく、夏も人を呼び込むための何かが必要になり、

「誰でも、簡単に、手軽に、手ぶらで」出来るラフティングに注目し、1995年にニセコア

ドベンチャーセンター(NAC)を設立し、アウトドア事業を起業したことなども紹介。事業が流れに乗るまでに苦労された点や、工夫されてきた点だけでなく、子どもが川で遊ぶことのメリットについて、ニセコ地域の素晴らしさも交えてお話いただきました。



6. 活動報告 14:10～

司会進行 NPO法人川に学ぶ体験活動協議会 平山康弘氏

各団体の活動状況を共有し、さらに各流域へとより良い活動を波及させるため、全国各地の10団体より活動報告が行われました。報告の内容では、「川の指導者」の育成や環境保全活動など、様々な活動が紹介されました。

なお、発表内容が次の分科会テーマの話題提供に関連するように、最初の3団体を第1分科会、次の4団体を第2分科会、最後の3団体を第3分科会とグループ分けし、質疑応答を前記のグループ別にまとめて行いました。

1) 倶知安町立東小学校4年1組

『山の川『尻別』は美しい』

「みなさま、今日は宇宙の果てからお出でいただきありがとうございます。私たちは『しりべつ川のイトウチャンズ』です。」の第一声で子どもたちの劇が始まりました。



この劇は、倶知安東小学校の子どもたちが川遊びから帰ってきたところに、尻別川の生きものが色々登場して川の話を作り取りするという構成。

発表を行った倶知安町立東小学校4、5年生の児童たちは、総合学習の時間に尻別川を取り

上げて地域の実態を把握して問題を見つけ出し、解決をする学習を行っています。今回児童たち



は学習成果を劇という形で整理。劇中ではイトウや川虫、川魚などに扮し、家庭の水を流さない、ゴミを捨てない、みんなが川を大切にすれば、尻別川にもっとたくさんの魚が生まれることなどを参加者に伝えてくれました。



さらに児童たちは、尻別川での学習や体験を通じて、自らの住む地域に生命と恩恵をもたらし、また、遊び場にもある「尻別川」を彼らなりに守っていかなければならないという意識を持ち始めているようです。

2) 手稲さと川探検隊

『市街地周辺部での親子自然体験活動』

手稲さと川探検隊は地域の社会人スタッフと北海道工業大学ゼミ生の協力を経て設立されました。親子と川で遊ぶことを知らない時代になっているので危機感を感じて地域での親子の自然体験を主体とした活動をしています。川だけではなく、カエルの卵（エゾアカガエルの卵）の調査やヒグマの生態の調査などを行っています。また、「傍らにある。ざわめく自然が、感



性を育む」との考えから都会のコウモリの生態などの調査活動も行っています。農薬を使わない作物を子どもたちと一緒に育てたりもしています。

今年一年の活動の紹介ということで「川の生きものとり」、「バードウォッチング」など川の上流から下流まで活動を行っています。

命との連携など常にワクワクする自然と人の関わりの環を広げています。

3) NPO 法人みずのとらベル隊

『新たなる河川文化の創造』

私たちは、「水の安全教育幼児プログラム」についてお話しをします。幼児の川の体験活動が少ないことからRACが制作をした「ワル河童を探せ！」のDVDを元に劇を作成して各保育園で寸劇を見せて、実際にライフジャケット

の付け方や川に入っの体験を行っています。本プログラムについて「安全教育」「環境体験」「環境教育」の各ステップを通じて参加者が環境について考え行動に移すことができるように



構成されています。幼児から小中高、大学、一般まで広く対象とすることができます。

このプログラムを通じてRACの理念の内容を実際に体験することができ、感動、遊び、楽しさ、やさしさ、豊かな人間性、人と人とのつながり、人と川の共存する文化、社会の創造、川の力、危険性の理解、安全への意識の向上を語るすることができます。

水辺での安全教育を基本として、実際の川での体験活動を通じての環境体験プログラムからの気づきが参加者の未来へ繋がること、また、より多くの人たちが水辺に集い、新たなる河川文化の創造ができるような活動を継続的にを行っています。

【質疑応答】1)～3)の団体

質問：倶知安東小学校では川の授業は何年生が行うのですか？

答え：今年の4年生が行いました。毎年4年生が行っています。



＜3団体の登壇＞



質問：幼稚園職員なのですが、当園でも川遊びをしているのですが幼児の体験プログラムがなかなかありません。川は危険ということで、思うように川で体験活動ができていません。どのようなやり方をしたのですか？

答え：地域で川の指導者を作って、小さな町なのでネットワークを使って活動を行っています。子供たちの笑顔など川で活動していると口コミなどで広がります。リスクマネジメントなど安全についてきちんと講座をして指導者育成を行うことです。

4) NPO法人まち・川づくりサポートセンター 『みんとち自然体験楽校』

当法人の今までの活動をこれからの活動について発表をいたします。「みんとち」とはアイヌ語でカップの意味です。



平成25年6月に設立した「まちづくり協議会」の活動理念を継承・発展させることを目的に平成23年11月に「NPO法人まち・川づくりサポートセンター」として新たにスタートしました。

主な活動は、環境保全活動、美化活動、水難・水防活動、子ども水辺活動を行っています。「みんとち自然楽校」は水辺の体験や自然体験の根



本的な楽しさや、真の面白さの味わいを学んだ体験を未来に活かして行ける子どもを育てよう石狩川で学ぶ「川育」を実践することが目的です。

実際の活動は行政と連携を図りながら、年4回の活動を行っています。春コースは「みんとちのかくれ家」というテーマで、夏コースは「みんとちの冒険」、川から見る石狩川を学びました。秋コースは「みんとちの知恵」ということで来週開催されます。冬コースは「みんとちのひみつ」をテーマに雪でイグルーを作ったり、スノーシューで普段は入れない場所まで入って体験をしたりします。

活動の成果と課題ですが、価値ある体験活動を計画実践ができ、準備作業など、指導者たちの絆が深まりました。参加者たちへの教育が必要であると思いました。活動のバリエーションを増やして、幅広い年齢層の指導者を育成しなければと考えています。課題解決には、多様な主体と連携をすること、活動の宣伝、啓発活動の充実を図らなければと考えられます。どんな活動も年齢ではなく、学ぶ姿勢があるかどうかです。

5) ハサンベツ里山計画実行委員会

『RAC講習フォローアップタ張川の指導者講習会』

当会は、タ張川支流のハサンベツ川を舞台に地域住民が主体となって町役場、企業、関係団体と連携をしながら里山づくり(田んぼづくり)、生態調査、環境学習、交流拠点づくり、植樹、



多自然川づくり等を進めています。ハサンベツ川を維持するためには夕張川での活動も行わなければなりません。毎月一回「ハサンベツの日」を作って環境学習を行っています。

また、複数の団体が川を使っの活動を行っています。これらの活動を安全に楽しく行っていくために人材育成が急務となり、平成21年に当会の呼びかけでRACの指導者講座を開催しました。以後、フィールドでの実践が大切ということで毎年自主講習会を開催しています。

川のガキ大将になり、上から目線ではなく、一緒に活動できる指導者になることが大切です。講習会の反復、体験の場数が必要です、また、川の理解も大切です。指導者の継続がとても大事です。

6) 日野川流域交流会

プロジェクト「リバビズ大学 in 日野川流域交流会」

福井県九頭竜川水系日野川からきました。

リバービジネスをキーワードに少子化定住対策に臨むプロジェクトとして「リバビズ大学」を立ち上げました。これまで里川として生活の

どにも期待が高まっています。大学、経営者、川を愛する多様な人とイノベーションによる新たな職業を創造し、新たな河川文化を展開している現状についてお話しをします。この度、外国人を対象（20代男子）に「休日の過ごし方について」アンケートをしました。結果としては、友達といる、どこにいいのかでは、家にいる。海にいる。川にいる。という答えがあった、川という答えがあり嬉しかったです。

また、何をしているかでは、今風でインターネットや本を読んでいるという答えもありました。休日にかけるお金については、1万円から3万円くらいが多かったです。時間的には3時間くらい遊んでいるという答えが多かったです。出身国の川についての質問をしてみました。

80%の人たちは良いという答えが返ってきました。普段は川をどのように使っていますか？という答えには散歩や釣りが多いという答えが返ってきました。

「おしゃれなリバー」については、参加者は20代から30代の人が多く、県外の人たちで車での参加が多かったです。今後、RACが目指す街づくりを続けて行きたいと思います。



入り口部であった川、現在は生業としていることが少なくなりました。反面、せせらぎなど癒し効果が人に与える影響が大きく、健康改善な

7) 東予環境グループ

『鞍瀬川・中山川・親子川遊び講座』

参加者の要望に応じて、国土交通省の出前講座を活用し、公開講座を開催して学び、現地に



行き、自分の耳で聞き、自分の目で見て確かめ、関係する行政に集ってもらい、質疑応答という『住民主導による住民参加』の取組を続けてきました。現在、いろいろな活動の案内を産、学、官、民に送っています。その中で、「東予環境グループ」は自然及び社会環境について、調査や分析を行い、保護・保存を進めていくことを目的に活動をしています。今は、愛媛県内の自然再生の取組を進めています。

今年からは新しく取組を始めたのが水難事故の防止です。私たちが主に活動している西条市では、昔から水難事故が起きていました。事故が起きているのは、この加茂川だけです。

3年前の2012年7月には幼児が、また、昨年の7月には高校生2名という痛ましい水難事故が起きました。

松山河川国道事務所では重信川の上流の「川で遊び隊」というイベントを行い、川の特長や危険箇所について子どもたちに知らせています。そこで、私たちが勝手知ったる鞍瀬川を会場に、今年から「親子川遊び講座」を開催することにしました。

これが今年の川遊び講座の様子です。一番小さな4歳児たちが、一番張り切っていました。最後にお礼があります。今年RACさんをお願いし、加茂川の水難事故現場の検証をしていただきました。交通事故や労災事故、海難事故や航空事故では、次の事故の発生を防ぐために事故の原因を調査します。しかし、水難事故では事故原因の調査は行われていません。事故が発生したときに、事故の調査が行われ、次の事故を防ぐための提言がされていたら、加茂川の取水口での高校生たちの水難事故は防げたかもしれません。次の水難事故を防ぐために事故調査委員会の設置をお願いします。

【質疑応答】4)～7)の団体

質問意見等はありませんでした。

<4 団体の登壇>



8) 尻別川の未来を考える「オビラメの会」 『絶滅危惧種尻別川イトウの保護増殖』

絶滅危惧種イトウの分布南限である尻別川のイトウを守るために流域の釣り師たちと研究者によって、結成されました。尻別川では昔は大きなイトウがあふれていましたが、今はとても少なくなっています。また、昔のようにたくさんのイトウが尻別川にあふれるように再現をしたいと思い2001年にオビラメ（イトウ）復活30年計画の活動を始めました。この成果についてお話しをします。昭和30年くらいまで



は大きなイトウがたくさんいて、イトウを釣る専門の釣り師がいました。その当時は釣ったイトウの169匹の半分以上は1メートル超えであったそうです。今は尻別川では産卵場所が無いからなど、イトウは何時いなくなっても不思議でないといわれています。

イトウは10年で3世代が繰り返さないと復活したといえないと言われています。親から卵をとって、放流して、卵が孵って3世代で30年計画を考えています。

再生産の手助けをしなければなりません。

- ・放流をする。
- ・住める環境を整備する。
- ・釣りのルール作りをする。

復活活動に着手してから15年が過ぎました。

1、天然の魚をもらい人口繁殖をして、残りの誕生した稚魚の放流は子どもたちにも手伝ってもらいました。

2、川に魚道を付けてもらいました。

平成24年から放流した稚魚が川へ帰ってきたことを確認しています。4年間続けて帰ってきている45匹、平成22年からは6年間天然産卵が確認されています。

たくさんのオスがメスを求めてバトルしています。見守り活動も行っています。イトウ資源の復活の兆しは見えてきています。これからは流域全体に広げていこう、稚魚を5,000匹から10,000匹を放流し、流域の人たちの理解を求めて、広報活動を行っています。

9) 一般社団法人流域生態研究所

『“川”という自然を通しての人間教育「かわ塾」』

自分は、物心ついてからずっと川が好きでした。自分たちは参加者たちに「楽しかった」と言わせるような体験を行っています。特に団体

に所属はしていません、対象者は幼稚園から学生までがメインです。

川歩きから川流れ、水生生物観察など様々な活動を行っています。

自分は少し、子どもたちより優秀なところを見せながら子どもたちと一緒に活動をしています、と言うよりも一緒に遊んでいます。子どもたちが楽しかったということが落とし所です。

30数年活動を行っていますが、学校では教えない人間として教える教育を行っています。川から忍耐力と知恵が自然を通じて学ぶことを目的としています。いろんなことが身についてきます。川塾では幼稚園から思いやりが出てきた、挨拶もきちんとできる子どもがいます。信頼の風景が大切です。おじちゃんイヤだなどと言うこともありましたが、信頼関係なども育ま



れます。

私たちは千歳川で川塾を行っています。生物調査と説明の体験など魚の説明をしています。子どもたちには絶対に嘘は教えられません。

魚の昼と夜の生活が異なることも学び、時に厳しく、時にやさしくなど立派に成長をしています。良い川には生き物はたくさんいて、川遊びも楽しくなります。川づくりからしっかりと行っていくことがとても大切です。

川の中で何をするのか？楽しい、川を制覇するととても楽しい・・・。

10) 河川愛護団体リバーネット21ながぬま

『「子供水防団活動」自分の身は自分で守る』

災害弱者となり得る子どもたちが、水害が発生したときに避難の仕方や実際に川に流される体験を行う「川流れ体験」を通じて水害時の判断力を養っています。また、土のうの作り方や積み方などについても実際の体験をして、逃げる際の服装などについても学習をしています。また、自分の身は自分で守る体験を行っています。

今回は「リバーネット21ながぬま」の子どもたちが水害時の体験の寸劇を行いました。



— 寸劇 —

「テレビで水害のニュースをやっているよ！」
「50年に一度の大雨です。300ミリで降り続いています。避難指示が発令している現場から中

「逃げる時には、水の深さに注意をする。膝くらいまでは歩ける。足元を確認しながら避難する。他に何かあるか？わからない。」

「隣近所で話し合って、一緒に逃げる。一人で逃げられない人たちを助けてあげる。」

「家の中に水が入らないように土のうを作る。」

「土のう袋に砂を入れる。土のう袋の紐を引っ張ります。口を紐で3回まわし上から下へ押し引く。これで完成です。」

※土のう作りの実演

「水の流れてくる方向に口を向けて土のうを積み。上に積み上げてく。もし、土のうが無いときには、ポリタンクとレジャーシートが代わりになります。」

自分の身は自分で守ります。



継です。」

「長靴で避難している人、裸足の人もいますよ。」

【質疑応答】 8) ～ 10) の団体

<3 団体の登壇>



質問：先ほど、妹尾さんが30年間この活動を続けているとおっしゃっていましたが、今までに一番苦労されたことは何ですか？



答え：大変だったと言うことはあまりありません。仲間がいないことが大変でした。子どもたちが育って、仲間になっているので20年前に体験した子どもたちが今は一緒に活動をしています。もう少し頑張りたいと思っています。

質問：「河川愛護団体リバーネット21ながめま」の子どもたちに質問です。水防団で活動をした感想は何ですか？

答え：楽しいです。楽しいこともあり難しいこともありましたが、楽しいことが多かったです。



7. 分科会

16:00～

※各分科会の詳細は資料編 1, ii 参照

1) 第1分科会

テーマ：進化する川遊び

高度成長期に断絶した川遊びは、川環境の意識の高まりと共に再び活発になってきたと言えます。新しい活動や装備・道具、安全対策が開発され受け入れられる現在を川遊びの新時代に向かう過程と捉え、川遊びはどう進化していくのか、我々はどう関われるのかを検証しました。

●コーディネーター

宮尾博一 氏（NPO法人川に学ぶ体験活動協議会）

新野和也 氏（NPO法人どんころ野外学校）

●話題提供者

原田秀夫 氏（TERRA 子野アドベンチャー）

相馬 孝 氏（小川原湖自然楽校）

第1分科会の様子



2) 第2分科会

テーマ：川の指導者なぜ育たない？

川に学ぶ活動を継続するのに問題となる指導者と活動資金の不足について解決策を考え、指導者育成の問題だけではなく、未来に向けた川に学ぶ体験活動のありかたを模索しました。

●コーディネーター

北川健司 氏（NPO法人川に学ぶ体験活動協議会）

湯浅芳和 氏（NPO法人まち・川づくりサポートセンター）

●話題提供者

千葉利光 氏（NPO法人帯広NPO28サポートセンター）

坂本貴昭 氏（NPO法人水環境北海道）

第2分科会の様子



3) 第3分科会

テーマ:身近な川の防災

住民やNPO団体等による河川愛護活動など、身近な川に親しむ活動を通して、水害に対する防災活動や避難活動を学び、河川環境の整備や保全等の取り組みについて模索しました。

●コーディネーター

藤芳素生 氏 (NPO法人川に学ぶ体験活動協議会)

北川淳一 氏 (蘭越町総務課)

●話題提供者

山本隆幸 氏 (河川愛護団体リバーネット 21ながぬま)

伊豆倉米郎氏 (NPO法人十勝多自然ネット)

第3分科会の様子



●各分科会での意見交換の状況



8. 分科会報告・全体会

17:30～

●分科会報告

分科会報告の様子



□ 第1分科会 宮尾博一氏・新野和也氏

□ テーマ 進化する川遊び

話題提供を二つ紹介します。相馬さんから、ネットやアプリを利用した自然観察のデータベース化についての発表をしていただきました。原田さんからは、具体的な活動の内容についての発表でした。



相馬さんは、学校教育や学校現場で行った体験活動の報告をアプリやクラウドを使ってネッ

ト上に掲載し、データベース化することにより繋がりのある人たちが多くの情報の共有をすることができるようになるシステムを現在研究中で、それに準ずるアプリを大学などの研究機関と協同で開発中との発表でした。

原田さんは、実際の活動としての学校教育の話について、幼稚園に入る時の入り方や、行う場合での注意点など、実際に子どもに水慣れを行なうにはどのようにするかなどを話していただきました。また、ガサガサ（水生生物観察）など専門的な言葉の共有を行いました。

幼稚園でRACリーダーの資格を取得して自分たちで川での体験活動を行っている方も参加していました。

まとめですが、「進化する川遊び」とのテーマですが、「進化とは何だ」ということが議論されました。昔に比べて何が進化したか、やはり装備の点について進化していると結論に達しました。RACの場合なら川や水辺で遊ぶときは必ずライフジャケットを着用します。そのおかげで今は安全な川遊びを行うことができます。川の安全対策、川の水の動きがこうなっているからこの場所は危険と説明ができ、応用で防災として使える、という意見も出ました。小さいころから水辺での体験活動を行っているのがいいという話が出ましたが、小さいころから行うにしても保護者も一緒に体験をすることで水辺の体験活動について保護者と人たちにも理解をしてもらうことができます。活動をつなげていくには地域・行政・民間・企業が一体になって行うことが重要であるということです。

最後に、川遊びから防災と出ましたが、川の体験活動を行っている最終的に自分の命を守ることができるようになります。自分の命を守ることが出来れば他人の命も守ることが出来るようになります。

また、ハザードマップというとても優れたものがあるので、それを利用して実際に足を運んで川原を川のそばを歩いてみるのもいいのではないか、という話も出ました。水辺での活動を幼稚園で行なった、地域の子ども会で行なった。それだけでは不十分なのです。RACがどのように関わるかです。結論的には流れを止めてはいけないということです。しかし、RACだけで行うのではなく、繋がり強い行政、国交省が行なう、民間・企業の人たちも協力して行なうことが、子どもの安全にも繋がり、地域の防災にもなるのではないのでしょうか。

□ 第2分科会 北川健司氏、湯浅芳和氏

□ テーマ 川遊び指導者はなぜ育たないか

テーマの「指導者がなぜ育たないか」ではなく、「川遊び指導者をどう育てるか」という前向きなテーマに変えました。

最初の前提として、平成13年にRACが設立されてから川の指導者を育成してきました。各団体、または個人でも指導者・次の世代をどのように育てるのかということを議題に話を行いました。



話題提供について簡単に紹介を行います。千葉さんは、年間2,500人、35校の受け入れを行っているそうです。千葉さんが職員一人で活動を回している状況で、指導者をどう育て活動に来てもらうかが課題となっているそうです。その解決策として、作業の分業を行い安全

管理は安全管理について学んでいるRACまたはEボート指導者が行い、学習指導を退職された教員の方に担当してもらっているそうです。分業することにより、一人のパーフェクトなRACリーダーを育てるのではなく、もともと持っているスキル+αを教えることで可能になる人材をボランティア登録として人員を確保されているそうです。

ただ、今後の活動の広がりをみせるとしたら指導者不足は否定できず、ボランティア登録してもらった人だけでなく、指導者の育て方も課題となっているそうです。最終的な結果としては、魅力がないと人が集まりません。魅力が無ければ指導者も育ちません。資金も調達出来ません。いかに活動を魅せられるのかが重要であるという話ができました。

新たな取り組みとして、観光するだけでなく観光に川を組み込む、公園と川を組み合わせる。具体的には、あまり流れのない川で子供だけでEボートに乗せようということが上がりました。これの延長上には、企業研修としても役立つのではないかと。中止となり実現がかなわなかったが、ある企業から108人の管理職の研修に川の活動が役に立つと発言されたそうです。

二人目の坂本さんから、大まかに話すと大きく分けて二つの要点に絞ることが出来るということをお話をいただきました。

一つは、指導者はある部分に特化した専門家であるということです。しかし、川で活動する上ではトータルで川を知る人がどうしても必要になる。コーディネートする人材が不足しているということ。

二つ目として、外に向けて何かをしていかなければ、先ほどの魅力ある活動に繋がるが人も集まらず指導者も育たないということです。指導者をどう育てるかということにおいて、大きく二つに分かれます。一つは専門職、雇用職、

生涯職としてのプロ化という部分。あとは、多くの団体が行っていると思われるボランティアの指導者活動です。そのなかでどう育てていくのかということ。プロ化は資金調達の問題となります。企業研修、または観光さらには団体など新しい資金調達が必要です。他には、国の事業や市町村の川の事業の請負を行うこと。河川整備基金などの助成金などを活用して指導者を育成すること。課題としてなかなか資金を調達出来ないということ。バランスのいい資金調達がなかなか難しいということ。参加費を取るのが最もいいのだが難しい。指導者を育てるに当って、知らない人を誘う、100人に当って1人に当ればいいという強い気持ちをもって当ってもらい、諦めずに継続的に行なうことが必要です。

また、川そのものを良いものにすれば川に人が集まってきます。それは、共感を生むミッションに繋がります。ボランティアの中にマネジメントする人がいれば人を育てることができます。その中で、魅力ある活動に連動するが活動があれば指導者も育つだろう。

補足として、個人的な意見です。話は何度か出ましたが、やはり川は特殊な環境ということです。全国的なプロモーションやキャンペーンなど少ないということを実感していると思います。「ライジャケオン」などといったキャンペーンが全国的に広がれば活動も行いやすくなるのではないかと思います。皆さんの力を結集する中で、河川財団や国市町村と通じて活動をしていければ良いなと思っています。

□第3分科会 藤芳素生氏、北川淳一氏

□ テーマ 身近な川の防災

ニセコ町の隣蘭越町で防災を担当している北川と申します。

第3分科会のテーマは「身近な川の防災」でテーマ設定の趣旨としては、身近な川に親しむ活動を通して水害に対する防災活動や避難活動を学び、河川環境の整備や保全などの取り組みについてを模索することです。



話題提供は3組。1組目はNPO法人十勝多自然ネットから、環境地域の防災に対する地域の取り組みについてです。特徴的なこととして、民間・行政それらに関係する組織が連携をとって取り組みを行って活動をしているという紹介をしていただきました。

活動に当って関連する組織の連携がうまくいっている秘訣は、もともと町内会、PTAなどが防災に対する意識が高く、中心になっていたことと、行政との繋がりも前からあったからこそうまくいっているということでした。

2組目は「河川愛護団体リバーネット21ながめま」の事例紹介でもありましたが、子ども水防団の訓練についての紹介です。水防団には約40人の子供団員が所属しています。活動の基本は自分の身は自分で守るという考え方を持って活動を行っています。

子供たちが活動に参加するためにどのようなことをしているのか、という質問に対しては、一様に楽しい活動を行っているとのことでした。

また、楽しい訓練を続けるための秘訣やどのような思いで参加されているのか、などといった質問がありましたが、それには子供だけでな

く、携わる大人自身も楽しめるような活動がなければ活動は長くは続かないという話でした。大人が「ガキ大将」になった気持ちで子どもと一緒にいる、という話が印象的でした。

関連して、苦労している点も一点。町の行っている水害・防災訓練に学校の子どもたちにも参加してもらいたいが、なかなか学校や教育委員会との折り合いが取れないそうです。そのことを受けて学校教育関係者の人からは、カリキュラムなどのハードルは高いけれども、防災というのは川のすばらしさや魅力を知ることができる一方で、怖さを知るための良い教材の切り口になるから、ぜひ学校教育の中に受け入れられると良い。だからこそ、一部の児童・生徒が参加するのではなく、全ての児童・生徒が参加できるようなものを目指せばいいのではないか、ということでした。

3つ目は、見附市長の久住さん、RAC理事平山さんから見附市の防災キャンプについてのお話を伺いました。直接のきっかけは文部科学省のモデル事業の防災スクールでしたが、その背景として、少し前に非常に大きな水害に見舞われ、小学校の一階が水に浸かってしまったという体験が、文部科学省モデルの防災スクールを始めるきっかけとなったようです。

話を聞いて非常に感心しましたが、大雑把にまとめると、しっかりしたカリキュラムが組まれて行われていて、成果、評価が得られているということです。市長からは、町内の防災訓練に、以前は中学生の参加人数が2名だったのが、今では930人もの中学生が参加しているというお話がありました。防災キャンプの取り組みの成果でもあり、水害にあったという教訓も重なって、見附市の防災意識は非常に高いという話をお聞きしました。

● 全体会

○コーディネーター

原文宏氏（シーニックバイウェイ支援センター）



□質疑応答・意見など

原：ご意見、ご感想なりありましたら。各会場で十分議論されたということで、この場では特に良いということのようなので…コーディネーターから一言感想なり、補足などがあればお願いします。まず、第1分科会からお願いします。

宮尾：「進化する川遊び」というテーマは幅が広くどう扱うか困りました。結果的に先ほどの話のとおり川遊びは幼児教育から防災まで幅広



くやるような時代になってきたということです。たまたま災害が頻発することもあるって、RACの役割が防災という意味でも活躍できるのでは

ないかと。繰り返しにもなりますが、ITを使ってRACの活動の幅を深めていくのか、ホームページは当然のことながら、活動内容をどのように紹介し、どう活用していくかということと期待されているのかなと感じました。多くの人が参加してもらえてありがたいと思います。

北川：RAC常任理事、人材育成部会部会長の北川です。やはり、一番多く意見が出たのは魅



力ある活動や人が、人を集めるということです。今回RACの全国大会にさまざまな人が参加されているのですが、全国的な交流を含めて議論ができれば活動のヒントになると感じました。今回も魅力的な活動をされている人たちに会えることができました。自分自身の印象として、北海道の川は他の九州・本州の川とは違います。なんだか、ワイルドのような感じがします。そういう意味では、僕らのフィールドとは少し違うのかなと思うのですが、人・活動の魅力は全国変わりありません。フォーラムでも全国から指導者が集まるので情報交換はできます。全国大会とフォーラムの年2回を情報交換の場としてうまく利用していただければと思います。

藤芳：他のところでも悩みとしてありましたが、活動をやっていく際に「学校とどのように連携をしていけばよいのか。」今回は行政、市長や町長もいらっちゃって、学校側の先生方もいら

っしゃいます。市民団体がいいことや防災活動などを行なっても行政・学校が受け入れてくれないと意味がありません。たとえば教育委員会などもあります。

結論から言いますと、やはり学校に行く側が赴いていくべきだということです。



また、学校にこまめに行って顔見知りになっていくことなど、もちろん行政も同様です。もう一点、RACで「学校連携コーディネーター」と言った、学校側のカリキュラムと言うものはどうなのか、われわれの活動をカリキュラムに合わせるとどのような目的目標が必要になるのか、などを学ぶための付加資格講座を設けています。我々市民団体が、学校のカリキュラムを知ることにより、学校の意図にそった活動を行いやすくなります。学校の先生がたのためのカリキュラムの時間数を減らした川の指導者になる「学校リーダー」なる講座もあります。

原：皆さんの話を聞いていると基本的なキーワードは「楽しい」ということですね。もちろん楽しいというだけでなくその中に戦略性があります。誰にもできる環境を作ることの中に装備などの安全性が組み込まれていて、リピーターを増やすということや修学旅行を対象にするのは安定的な収入となりますし、将来的にはリピーターとなるわけで楽しいと言うことをきちんと理解し、戦略を持って活動を行っているということが知れ、中間支援を行なう側とし

てそういったセンスが必要だなと感じました。そのようなことがうまく広がって、最終的にアウトドアというテーマでエリアブランディングができていると思います。逆にニセコに来たらあらゆるアウトドアが出来るという素地が出来ていて、ひとつのきっかけとしてロスさんがいるというのはすごいなと感じました。ニセコではアウトドアでありましたが、他の地域でもきっと別の切り口としていろんなことができるのではないかなと参考になりました。そのなかでエリアブランディングのなかで楽しい川というものがあると、経済的な面でも大きな効果があり貢献しているということはとても良い事例としてあるので、全国含めてどこでも参考に出来ることではないかなと思います。当然そのためには、安全は基本ですが、河川や水路の整備の部分に楽しいということへの配慮が必要になるのかなと感じました。楽しい川。ハードの装置・器具・装具は重要ということも感じました。ちょっとした水路も楽しい川としてその地域の中にあることが必要で、配慮する必要があるということ。ソフトの仕組み、指導者やプログラムがハードと密接にリンクして出来上がっていると思います。ハードでこのようなことが出来るからソフトでこのようなことが出来るということになります。つまり両方を良くしていかなければならないと言うことが分かります。もちろん両方に資金が必要で資金繰りをどのようにするかということも問題ですが、今後RACの中で進化して具体的なテーマとして解決されていくと非常に良いなと思っています。RACの果たす役割と方向性を示すということは非常に重要なのではないかなと思います。

全ての分科会に共通すると感じたのは川と教育、というものがあると感じました。幼児教育だとか社会教育だとかの部分。幼児教育は文部科学省の分野で、防災教育は文部科学省も関係

しているだろうが国土交通省だとかさまざまなところが関連しているし、環境教育に至っては環境省など。人間教育はもっと大きなものですね。いずれにしても川と教育というもののシンパシーがあってかわりがある中で第1分科会に参加していたのですが、知見の蓄積を継承することの課題。小学校、幼稚園との連携は非常に重要なのですが、そんななかでPTAからの理解というものが話の中に出てきていて印象に残っています。全体的な活動事例。ボトムアップ的な広がりを感じます。独学的な部分がある一方で社会的なシステム自体を変化させなければならぬということを感じています。

札幌は前市長が3つのテーマを打ち出していて、「雪・環境・読書」でこのなかで雪がもっとも進んでいるテーマであり私自身もかかわっています。雪の学習をきちんと学校の先生たちが作ったものが整備されていて、その上で学習指導要領というものがあります。学校教育の理念などが書いてあるもので、学校の先生たちのバイブルは学習指導要領です。これに川の学習をなささいとは書いていないのです。

学校教育の目指すべき方向と、我々がめざしている防災教育だとか、基本的に違うのですが、指導要領にある程度合致する点には学校も組み込みやすいと思います。過去10年間活動を行ってきた上でそのように感じます。学習指導要領の改訂が行われた後、各地域で改定箇所の改定点のまとめなどが各地域で作られています。教科書そういった中に指導として教材に取り組まれるようにすればいいのではないかと感じます。そういったこともRACが中心となってやっていけるといいのではないだろうかと思っています。

また、私の所属する団体では、小委員会と言うものがあって教員の方と教育委員会、文科省の方々などとリンクして防災教育や環境教育な

どをやっているようにしています。私の意見ではあるけれども、ぜひこのようなことも含めて、下からも上からも、行政からも地域からも両方からアクションを行って、ある指導として川を使った教育が学校側でも行いやすいし我々の側でも進めやすいというような関係が出来れば良いと思います。今日全国から皆さんに集まって頂いて話を聞いて、川っていうものはもちろん危ないこともたくさんありますが、それだけではなくて楽しい川というものが全国にたくさんできればいいなと思います。最後に各分科会の発表者の皆さんに拍手をお願いいたします。各分科会の発表者の皆様ありがとうございました。

全体会の様子



【全体会の取りまとめ】

●全体会報告会では、この事業による妥当性や有効性について、発表等を通じ様々な視点から活動の相互評価を行い、それぞれの団体が持っている課題の解決や規範となる点を伸長させることができました。

また、今大会の尻別川・ニセコ地域がこれまでの開催地とは異なった自然環境、歴史、文化を持つ地域であることを参加者で共有したことにより、日本の伝統的な河川文化も参考にしながら北海道の独自性や効率性を持つ河川文化構築なども検討することができました。

そして最後に、参加者全員の意見交換により、川に学ぶ体験活動におけるキーワードや課題を次のとおり取りまとめることができました。

○楽しい「かわ」

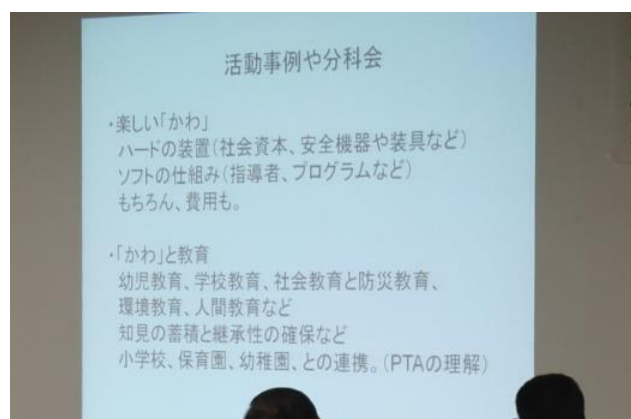
i・ハードの装置（社会資本、安全機器や装具など

ii・ソフトの仕組み（指導者、プログラムなど）
もちろん費用も。

○「かわ」と教育

i・幼児教育、学校教育、社会教育と防災教育、環境教育、人間教育など、

・ ii 知見の蓄積と継承性の確保 iii・小学校、保育園、幼稚園との連携（PTAの理解）



9. 閉会式

18:15～

●閉会式では、NPO法人川に学ぶ体験活動協議会副代表理事藤芳素生様より閉会の挨拶と次期開催地のご紹介をいただきました。

藤芳：今日一日皆様大変お疲れ様でした。しりべつりバーネットの皆様には大変感謝をしてお



ります。

この大会を経て北海道の水辺の体験活動などは行政及び市民団体の方々についてはとてもしっかりとした活動をしていると感じました。北海道はRACの最前線の地域なのに全国大会を開催したのは初めてです。全国大会の最初の初心に戻った北海道での開催が無事に終わり、次は、大阪で開催予定です。「近畿子どもの水辺ネットワーク」の沢井先生が引き受けてくれました。

沢井：RACでは15年前に大阪、近畿を中心にしたシンポジウムを行いました。700名くらいの参加者があり、準備にも苦労しました。久しぶりにRACの全国大会に参加しましたが大変勉強になり、北海道の川の活動の熱心な議論をつくづく痛感しました。私たちも仲間に入っていかなければならないと思います。大阪はアンチ東京という、不思議な土壌。必ず独自の

ことを付け加える。今考えているのが、「琵琶湖・淀川流域圏」としたい。兵庫奈良を含めた圏域で開催したいと思います。私は「川に学ぶ」という言葉が気に入っています。集まりにくい日程になりそうだが、参加者多数を目指したいと思います。



10. 交流会 18:30～

●交流会司会進行：NPO法人山のない北村の
輝き理事 橋本拓氏

交流会では、参加者が豊富な地元食材に舌鼓を打ちながら、河川の「新たなる文化の創造」を大いに語り合いました。

はじめに、記念品贈呈から始まり、開催地片山ニセコ町長の歓迎挨拶、乾杯を歓迎オープニングセレモニーとして地元有志による「おやじダンサーズ」で雰囲気のを和らげました。

続いて、しりべつリバーネットから次期開催地「近畿子どもの水辺ネットワーク」の沢井先生にRAC旗を引き渡し、来年度に向け誓いを新たにしました。このほか、お楽しみ抽選会に加え、最後には参加者全員で「ジャガ音頭」を輪になって踊りました。

RAC代表理事の久住氏からこの度の第15回川に学ぶ体験活動全国大会 in 尻別川を記念して、子ども用ライフジャケット20着が贈呈されました。

夏になったら尻別川で遊ぶ子どもたちの姿が目に見えます。

片山町長から、作家有島武郎とニセコの関わりや、観光、文化、産業の紹介と歓迎の挨拶がありました。



歓迎オープニングセレモニーとして地元有志による「おやじダンサーズ」で雰囲気を盛り上げました。



尻別川実行委員会から次期開催地「琵琶湖・淀川流域圏」へRAC旗の引き渡し



交流会会場の雰囲気。地元の食材を活かした、食事として寿司、焼き物（ジンギスカン、ホッケ、ホタテ等）、鍋物、天ぷら、チャンチャン焼き、パスタ、サラダ、野菜やポテトなど水産、畜産等の食材とニセコビール、羊蹄ワイン、地酒で大いに盛り上がりました。



交流会の食事風景



交流会の懇談風景



お楽しみ抽選会の景品は、参加者全員に当たるようにニッカウキスキー竹鶴、温泉宿泊券、また、流域町村のニセコ町、喜茂別町、真狩村、京極町、留寿都村、倶知安町、蘭越町の特産品を用意しました。

抽選会の司会進行する、NPO法人山の無い北村の輝き橋本拓さん。



交流会の最後には全員で、ジャガ音頭を輪になって踊り北海道ニセコの思いを満喫しました。



11. エクスカーション

9月27日は尻別川を「知る・見る・体験する」

エクスカーションを行いました。

その実施状況報告を写真で報告します。

(当日は全員町民センターに集合後、各フィールドにはバスで移動しました)

1) カヌーツーリング

ガイドは実行委員会事務局の南さんを中心に尻別川下流左岸蘭越町大谷から名駒までの約5kmを体験しました。

カヌーツーリング及び
鮭遡上ウォッチング箇所



出艇前のミーティング



いざ出艇



最初は穏やかな流れ！



急流危険箇所もあり！



石淵地区 イトウ、サクラマス
の休息・生息場所！



ゴール地点



お疲れさまでした



2) 鮭遡上ウォッチング

参加者は移動中のバスの中から、流域生態研究所の妹尾所長による鮭の遡上に関するレクチャーを受け、目名橋右岸の名駒防災拠点に到着しました。次に捕獲場を見学後、目名川右岸沿を散策し、水中での鮭の遡上を観察しながら尻別川合流点近くの平瀬で川に入り、鮭の自然生態を学びました。また、帰路には防災拠点付近で流域環境保全に資するようお願いを込めて、バイオブロックによる記念植樹を行いました。

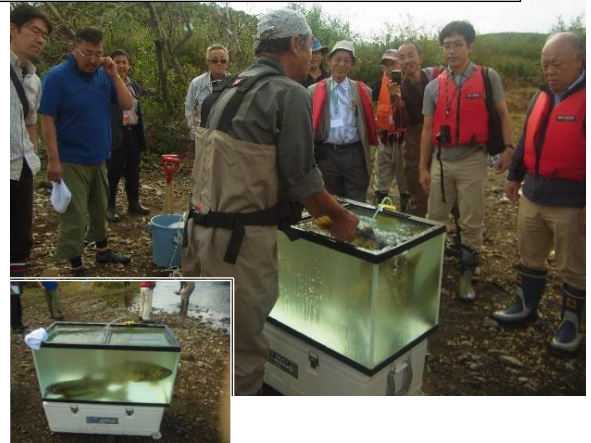
妹尾氏による車中でのレクチャー



捕獲場より下流の目名川。ここより右岸沿いを鮭遡上の観察を行った。



妹尾氏から鮭の生態についての説明



鮭の雄と雌の見分け方（油びれで見分ける）



鮭の産卵場所で卵を発見

投網による鮭の捕獲体験





捕獲した鮭に触れる。



鮭遡上見学体験後の集合写真



●記念植樹

防災拠点付近でバイオブロックによる記念植樹を行いました。樹種は中心木としてチシマザクラ15個、キタコブシ15個、周辺木にはハンノキ10個、ドロノキ10個、ヤナギ10個の合計60本を用意。それぞれの樹木を1個ずつバイオブロックに植え、6個で1組のサークル上に配置、合わせて10サークルを完成させました。



記念植樹の全景写真



バイオブロック置くだけで植樹ができます。



記念植樹後の集合写真

3) ラフティング

ライオンアドベンチャーのスタッフに事前に説明を聞いて、いざ、尻別川へ出発。出発したとたんに水かけが始まり、冷たい尻別川に飛び込み、ほとんどの人がずぶ濡れになってしまいました。コースはニセコ町市街を流れる尻別川で尻別第1取水堰の下流から第2取水堰の上流の約4kmの区間を下りました。



■資料編

1. 議事録、講演内容詳細（i 基調講演、ii 分科会）

i 基調講演議事録

「新しい北海道の河川文化とは」

株式会社 NAC 代表 ロス・フィンドレー氏

【基調講演】

今日は新しい北海道、河川文化についてお話します。新しいというよりは他の文化、どう新しいのかと考えました。尻別川も僕が来てから川の文化が変わってきました。川の文化だと河川管理が必須になってきます。そして、河川管理法が変われば、川の文化も変わるほど、強いつながりがあります。

1989年に北海道にスキーに行いにきました。冬のスキーだけでなく夏も北海道に居るようになって、海のない所でサーフィンではない他の本州の方での遊びを考えていたら友人が尻別川でカヤックをやっていました。これだ、と思いました。カヤックの沈没は最初は怖く、ひっくり返って直ぐには当然起き上がることが出来ないため、ボートから体を抜いてボートとパドルを回収して、岸に上がった後ボートの中の水を出して、と面白いスポーツではあるけれど初めは怖い思いをします。オーストラリア人は何かをする際、まずは「遊びたい」という気持ちが先立って始まります。しかし、日本人は技術が先立ちます。確かにテクニックも大事ではありますが、遊びたいという気持ちも大事だと思います。そして、カヤックをやっていた時に、川でもサーフィンができると思い、これは楽しいなと感じました。瀬のある所へ行行って、ひっくり返っては泳いでの繰り返しにはなるけれど、その繰り返しの中でテクニックを覚えることが出来ます。サーフィンが出来るとわかってからは、私自身は毎日川でサーフィンを行いながらテクニックを覚えて、日本の友人達はテクニックの練習を行いながら遊んでいました。でも、テクニックも大事だけれども、遊びから覚えることもとても大事だと思います。

北海道に住み始める前に、遊びに来たときはまだ川で遊んでいる姿を見かけていました。私よりも1世代上の方は、学校にプールもなく河川管理もそんなに進んでいなかったこともあって、川が遊び場だったのだと思います。しかし、北海道の各地で洪水が起こり、ここ倶知安でも洪水被害にあいました。町を守るために堤防を作って安全に水が流れるように、河川改修を行いました。町を守るためには必要な事であり、母国オーストラリアでも行っていることではありますが、町民と川の間に大きな壁が出来てしまったのです。昔は倶知安の駅裏、町中でみんなと一緒に遊んでいたの

が、川から離れてプールが遊び場になってしまうと川遊びの文化が途絶えてしまいます。次の世代に川遊びの文化が受け継がれないことにより、「危ない！遊ばないで！」といった看板が立ってしまい川からシャットアウトされてしまうと、川は危ないよとインプットされてしまいます。尻別川でも少し歩くだけでも看板は見つけることが出来ると思います。

大阪や東京などの大きな町では、河川改修が進んでいて、自然の川というよりもただ水を流すだけの川になっています。テトラポットが見える川は本国では見たことが無いのでショックを受けました。

カヤックを尻別川で始めてから、どんどん楽しくなって上達していくとカヤックもいいけれど、カヤックは誰にでも出来るものではないなと思いました。当時１９９１年～１９９４年まででカヤックを行っていたのですが、その間にどんどんスキーバブルが減ってきていました。スキーとカヤックは直接的な関係はないかも知れませんが……。スキーの利用客が減ったということは、ペンションの利用も減るということで、ペンションのオーナーさんたちは、夏にも利用客を呼ばなければ生計が成り立たなくなってしまう状況になってしまいました。そこで、地域の若者として地域で出来る遊びを作れば人も集まるのではないだろうか、と思い夏に出来る遊びを考えました。考えた時にラフティングをすぐに思いつきました。ラフトは８人乗りの大きなゴムボートで、「誰にでも」「すぐに出来る」ということがキーポイントだと思いました。しかし、まずは川＝怖いという教育がされていて川は怖い、近くに寄らないで、というところをどうにか拭わなければならないですよ。でも、ラフトなら皆で入って皆で楽しんで泳げない人であってもライフジャケットを着ているから大丈夫、そして服装も何でも良い、という条件なら気軽に参加できますよね。こんなことをすると人が集まるのではないかな、と思いました。実際にやってみたら人は予想以上に集まりました。

参加者の皆さんは、基本的に夏にラフトをやりたがります。しかし、北海道の夏は２週間程度ととても短いのです。７月～８月にかけて、と考えると夏休みの期間中となります。そうやって、人が集まってきたときに、ペンションの大家さんと同じように夏の２ヶ月だけで一年暮せる程度の稼ぎが出来るか？ と考えるとやはり稼げないと考えました。そうすると雪解けの４月～雪の降り始める１１月までの期間で出来ればいいかな、という考えにいたりしました。４月の雪解け水の中でカヤックをやった時に、ウェットスーツでは寒くてとてもではないが無理だと思った。そのため寒い時期にラフトをやるのであれば、ドライスーツが必要になります。会社を立ち上げる際に道具をアメリカからドライスーツ、ボート、ライフジャケットの仕入れを行いました。パドルはさすがに揃えられなかったのが、初めは自分で作っていましたが、毎日パドルを修理していました。それも、２年経ってお金が溜まった頃にパドルを揃えました。

当初の予想は１００～２００人程度かと思っていましたが、予想に反して初年度は１，５００人が来ました。リゾートでは誰でも出来る、ということを作ると人がたくさん来ると思います。また、リーズナブルな設定で行うことでより気軽に出来るようにしました。そして、ラフトなら直ぐに誰にでも出来て、服の上からドライスーツを着用出来るし、調整も出来るのでとても気軽に出来ると思います。

冬が終わって夏になると、観光客を呼ぼうとするのはホテルや旅行会社も一緒なので、最初の５年はメディアに良く取り上げられていました。ラフト以外にも、ダッキーやシートンカヤック、SUPも始まりました。急な川では出来ませんが、ゆっくり下るには尻別川がちょうどいいのです。

会社を建てて、2年目には7,500人、3年目には15,000人もの人がきました。安定してきたので、新しい事を始めたくまりました。ニセコは自身の中ではアウトドアのイメージがあります。川遊びやスキー、山登り、サイクリングなどなどをエリアブランドにして、外遊びの町とすると人の頭に残りやすく、アウトドアスポーツのエリアはあまりないので人を惹きつけやすいのではないのでしょうか。

尻別川は年間で約10万人もの人が川下りを行っていて、その3分の1はうちの会社で行っていると自負しています。春先は雪解け水が流れていて水量も多く、波が大きくとても楽しいです。先頭に乗っている人は必ず濡れます。20年近くラフトを行っていますが、ガイドとして一緒に行くと参加者の「楽しい」という感情が出てきているように感じます。春が一番楽しいと、個人的には思っていますが、始めて参加する人は夏に来て、リピーターの方は春によく来ます。

ラフトは半日のプログラムで行っているの、残りの半日でエリアを通して他に何か出来る事が必要になります。エリア内でいろんなことが出来ると、その場所で長くゆっくりすることが出来ます。アウトドアニセコ、夏冬にニセコに行けば外で遊べると思っていると思っています。

会社では一般の受け入れだけでなく、修学旅行生の受け入れも行っていて活動の最中は盛り上がりがないように見えますが、帰り際に盛り上がりがありました。頭のいい人は遊びや会話が下手な人が多く、発想が出来ない子に思われがちです。コミュニケーションが出来ない子は伸びにくく、普通の子は発想が上手だと思います。本国には、研修旅行はあっても修学旅行はありません。子どもたちが自然な川が見たことが無く、近いところの川しか見ていません。川遊びでは、こんなことが出来るんだよ、という種をまいているという感覚で活動を行っています。

おじいちゃん、おばあちゃんは川で遊んで、それから距離が離れて川遊びが減って、ラフトが始まって少しずつではありますが、人が川で遊び始めた印象があります。川で遊ぶ人たちはライフジャケットを持っていません。昔は先輩たちが危険な事や楽しい事を教えてくれていました。人が川で遊ぶという事を考えると北海道はもう一つのアクションがある方が良いと思っています。普通の夏の水量でも楽しく遊べるようになると良いなと思っています。それには、河川をいじって何を作ればいいのかという事ですが、瀬を作ったりプールを作ったり、ターザンロープで着水出来るようにしたり、こうすることで町の文化が変わってきます。町の文化が変わることで町の経済効果にも変化があります。住んでいる人は、町が楽しく住み続けたくります。長く住むには衣食住は当然のこと、遊ぶ場所が必要です。ニセコは環境が良いため外からも人がきます。子供たちが携帯ばかりで外で遊ばない、と言いますが外に遊ぶ場所があれば子供たちはそこで遊びます。

北海道に提案させていただきます。ある程度の勾配のあるコンクリート河川に瀬を作って、子供が安全に遊べる場所を作ると、それだけで川の文化が変わります。投資したものが何倍にもなって返ってきます。この経済効果は大きいと思います。札幌の観光のために、市民や子供の教育のために、川の環境保全のために、楽しく遊べるものがあればとても良いのではないのでしょうか。

遊び場があるだけで、交流も出来て思いでも作ることが出来ます。それだけでなく、観光客はリピーターになってきてくれるかもしれません。いま、地元の人との交流の場所はあまりありません。山登りの時は少し出来ますが、交流があるアウトドアはそれくらいです。川ではそういう交流は出来ないのが現状です。今度新しく新幹線が出来るので、遊びや、町の交流をどうしようと考えなければなりません。

尻別川は全長126kmの長い川で羊蹄山蝦夷富士を望む川で、水もとても綺麗です。「北海道では富士山を江戸富士と呼ぶんだよ」、なんて言いたいです。北海道の人はそれくらいのことは思わないといけないと思っています。

私は川から毎日見ている人間です。コンクリートを入れて改修を行うとイタチごっこになります。川を改修して波を作るのはどうだろうか、他にも対策は出来るのではないかと思います。ラフトは波があるからこそ楽しいものですから。最近河川改修の時にラフト会社の話しに聞く耳を持ってくれています。交流して話し合いをして提案を出して河川改修が行われます。道路拡張工事の際に、河川環境とのつながりが弱い、環境と川とのつながりが弱いと提言させて頂きました。

今、また新しい発想を考えています。外遊びがブランドに含まれる事で、家の外で遊びます。楽しい川遊びだけでなく、文化を作っていきたいと思っています。

ii 分科会 議事録要旨

第1分科会『進化する川遊び』

コーディネーター：宮尾博一 氏（NPO法人川に学ぶ体験活動協議会）

新野和也 氏（NPO法人どんころ野外学校）

●話題提供者：相馬 孝 氏（小川原湖自然楽校）

ガサガサから自然観察記録を行うアプリの開発についての発表を行うのですが、ガサガサを知らない方はいらっしゃいますか？川や用水路で網を入れて、草むらで足を使って生物を網へ追いやります。そのときにガサガサと音がしますよね？専門用語ですが、これがガサガサです。水生生物の昆虫・魚を捕まえます。ガサガサを行っている学校では自分達が行ったことを残すために壁新聞を作って廊下に貼り出したりします。このような活動はこの学校でも行っていますが、その何が問題なのかということですが、記録がペーパーであるために、毎年破棄されています。毎年行っている活動の記録を保存して調査比較出来る様に、担当の先生達が居なくなってもやっていけるようにと改善を行いました。青森大学と一緒に、地図アプリを使って、子どもが環境学習の一環として入力し、クラウドで情報を共有しネットで見られるというシステムを作ってそれを運営しています。どういうものかというと、私が住む小川原湖の近くの六ヶ所村にある沼を観測ポイントとして、観察を行いそこにどんな魚がいたのか、例えば「クロソイ」がいた、「ワカサギ」がいた、などを子ども達がチェックして書き込んでいきます。書き込んだら編集が出来ないような閲覧モードに変えてアップロードを行います。その情報を水の状態や生き物の状態がどうであったかがわかるようにチャートにして一目で分かるようなシステムを開発しました。グーグルマップを使っているのでWEBを見られる人ならどこからでも閲覧が出来ます。開発してまだ2年なので、良い所悪いところが出てきているので、改良中です。改良後には情報がしっかり残って次へ伝達できるということ、今までと違ってどこにいてもそれが確認できます。全国の情報を

反映出来る様になるとか、全国で行っているさまざまな水遊びの情報を持っていると、といった情報も一度に見られるような取組みをやっていければと思います。

●話題提供者：原田秀夫 氏（TERRA 子野アドベンチャー）

私たちの活動は川の中で遊び、学ぶという活動を行っていますが、ライフジャケットを付けたり、場所によってはいろんな装備を付けなければならないことなどを教えたりしました。初めは小学生中学生をターゲットに行っていましたが、だんだんと保育園幼稚園にターゲットを変えていきました。子どもたちを川に連れて行ってじゃぶじゃぶと遊ばせるだけではなく、流れに慣れさせる前に顔を水に付ける子ども、中には水の中に入って遊ぶ子どもがいたり、川に連れて行っても怖がって入らない子どもいたりします。その時には足を付けてじゃぶじゃぶとさせて帰るだけの活動になることもありました。まずはプールで授業を行い水に慣れることから始めます。親子で一緒に行っていくという形で行っています。川で遊ぶっていう事を作り、危険を知りながら遊ぶということを行っています。小学校では、保護者や先生と一緒にDVD「悪ガッパを探せ」でした。プール遊びではチームで行いました。

長い間、活動を行っている小さい時に一緒に川の活動体験した子どもたちが中学生や高校生になりジュニアリーダーとなり、新しい子どもたちの面倒を見ています。

修学旅行生たち向けにキャニオニングやラペリングなどを行っています。昔はライフジャケットも付けずに子どもたちだけでよく川で遊んだものです。今はライフジャケットやヘルメットを付けて遊ぶようになりました。熊本大学では、今までの座学の授業から課外授業になり、実際に川を下る体験や沢登りの体験を一緒に行っています。こちらがしっかり安全確保を行っていれば、みなさん全員降りられるようになります。遊びの視野が広がることでその中にある程度の学びがあるという感じではないでしょうか。進化する川遊びというよりも、進化させた川遊びと言う感じです。学校や保育園との連携を行いながらこちらから仕掛けていくようにして活動を行っています。子どもたちが喜ぶ顔を見ながら次に必要なものは何だろうと考えます。

●意見交換

質問：修学旅行生にはどんな体験をするのですか？

答え：基本的にはラフティングです。

質問：小川原湖自然楽校では、伝統的にポピュラーにやっている活動はありますか。

答え：幼稚園に対して水遊びということでカヌー体験、カニ釣りなど行っています。地域柄安全面を考慮してスノーシューや雪遊びなども行っています。

コーディネーター：ライフジャケットを付けた川遊びを長年行ってきて更にどう進化を遂げたかということを経験したいと思っています。

質問：RACの方の話と自分の体験も踏まえて思うのですが、体験を行っていく中で子どもたちに段階的に教えていく中で、ライフジャケット等のツールを使って出来なかった子どもた

ちが出来るようになるとか、いくつかの段階を経ていれば中学生が小学生の面倒を任せても安心出来るようになる、そのような内容だったと思います。お聞きしたいのですが、昔の「ちょっと岩を抱えて向こうへ行ってみよう」とか「おまえ潜れねえのか」みたいな状況の中で出来ない人と言うのは結構多かったのではないのでしょうか？

答え：いました。

コメント：それに対して、道具を使いながら教える事によって出来ないという子どもが減っているのではないですかね。それは、ある意味進化しているという事で、遊びそのものというよりも川での活動と言う行為が、どういうものなのか、どのような危険性を持っていて、それを団体マニュアルでどのように取り除く事が出来るのかという意味で純粋にただ動くだけという遊びから、遊びにはルールもあればコツのようなものもあって、ほとんどが体系化されて行って広がりやすくなっていったのか、個人の能力によって例えば柔道や剣道など、昔は体格が良い方が強かったりしたが技が磨かれて行って体系化されれば、体が小さく元々恵まれていない人間でもそれが出来るようになる。要するに川遊びにしたってツールと言うものを便利にするか経験と言うものを活かして体系化することが出来た事によって議論することが出来るようになる。これは一つの進化の形ではないか。昔の出来る人が少なかった子どもたちと今の子どもたちを見て比べた時に長く活動されている方みたいな方々が、子どもの時に度胸試しを経験されている方が今まさに子どもたちの親世代なのでしょう。全体のレベルとしてはどうなっているかという所で差を議論していただければ、そういったところで進化は見てとれるのかなと話を聞いて思いました。

質問：2・3気になる点があるので、質問させていただきます。先生が代わると活動がなくなるとおっしゃっていましたが、先生が活動に興味が無いのかそれとも先生自身が、例えば動植物のこれがなんであるか、などといった指導能力がないのか、ということなののでしょうか。

答え：学校の先生は基本的に両極端です。また、活動をサポートしてくれる人がいません。校長先生に許可をもらわなければできないことや、また逆もあります。校長先生がやれと言ってもやれる先生がいなければできません。先生が変わると活動自体がなくなってしまう危険性があります。しかし、PTAを巻き込むことでしばらくは活動が続きます。いろいろな人たちと繋がりを持つことです。

質問：水環境学習のデータが残るという話があったと思うのですが、データが残るのはいいのですが、そのデータの主力を何に使うのかというのが、お聞きしたいです。

答え：環境省の水辺のすこやかさの指標というものを2009年くらいから出している。そういう活動に基づいて行っている。ただ、レーダーチャートそれだけでは面白みがないので、それを可視化した。どうせやるのであったら、ここにはどんな生き物が居る、とかパックテストを用いた水質調査をすることによって二段階で水辺のきれいさなどが分かるので、そういうことを進めている。今回の場合発表する時間が無かったのですが、ガサガサをすることで

指標生物という生物が取れ、指標生物というその生物自身が水質の基準となる生物がいる。例えば、ヘビトンボならきれいな水、ヒルやアメリカザリガニなどが居たら汚い水などといったことがガサガサした段階で見て取れることもある。

質問：本日はワカバ幼稚園の方がたくさんいらっしゃっているのですが、幼稚園での取り組みはどのようにされていますか？

答え：20年以上前から尻別川で魚釣りを行っていて、5、6年前にリーダー研修のことで知り、職員がRACリーダー研修を受け、ライフジャケットなども揃えて魚釣りを行う前に川遊びも行っています、川の活動を始めて5年くらいが過ぎました。保護者の方は魚釣りをしている頃から、保護者にも「参加してください」と言っていたので遊びにも参加はいただいています。保護者のお父さんの参加が増え、園でも子供用と大人用のライフジャケットを揃えました。

●まとめ

- ・アプリを使った環境教育のDB、学校現場で行った体験活動を壁新聞としてまとめてクラウドに入れて全体で見られるようにする。
- ・昔に比べて川遊びは何が進化したのか？今は川で遊ぶときにはライフジャケットを着用することが浸透してきている。
- ・幼児の川遊びについては親をいかに巻き込むことが重要である。



第二分科会「川の指導者はなぜ育たないのか」

コーディネーター：北川健司 氏（NPO法人自然体験活動推進協議会）

湯浅芳和 氏（NPO法人まち・川づくりサポートセンター）

●話題提供者：千葉利光 氏（NPO法人帯広28NP0サポートセンター）

川の指導者養成について、話を行う。

学校の受入を30校ほど行うにことになったが、平日に動ける指導者がほとんど居なかった。指導者を養成するにしても、平日活動が可能で21時間の講習を受けてなおかつ活動の手伝いをしてくれる、という人はほとんどいなかった。そこで、川に子どもを連れて活動を行なう場合、仕事は大きくわけて「学習指導」と「安全管理」の二つに分けることが出来ると考えた。安全管理については、RAC指導者が専門の資格を持つ人に担当をして貰い、学習指導は退職した先生に声をかけた。全てを行えるオールラウンダーの人は圧倒的に少なく、圧倒的に足りない。しかし、体験活動だけであるなら時間も少なく、その方が持っているスキルプラスアルファするだけで現場に入ることが可能となる。

次に、潜在的に興味がある人の確保について考えたところ、プレパーク・プラス・リバーを考えた。公園と川が同じような感覚になれば、川に来る人口も増える。この企画の先駆けとして、川の流れ体験を試験的に行ってみたが手応えを感じた。

良いことをしているから集まって、と言っても人は集まらない現状を踏まえて、人は理屈では集まらない何か魅力があるものがあることで人が集まり、指導者が育ちやすいのかと思う。

●話題提供者：坂本貴昭 氏(NPO 法人水環境北海道)

指導者の質・中身など、課題になっていることを話題提供として発表させていただく。どこの状況も同じだが、指導者がいない、高齢化が進んで人がいなくなってくる。そういう点も踏まえて、大きく二点話をさせていただく。

一点目、今指導者といわれている人はある分野での専門家で第一人者と考える。そういう人たちが集まっていたおかげで出来ていたが、ある時点まで行ったら、今後を考えて後継者を育てなければならない。そう考えた時、川のことをトータルで理解している人はいないのではないかと、思った。川には複数の顔を持つ多様性がある。そのため、指導者は自分の分野だけでなく、他分野との繋がりが必要でありそれらが繋がることでより広がりを持て、指導者の基本的な質も向上するのではないかと考えている。

二点目、北海道の特徴かもしれないが、川で活動していると「川でなにしてるの？」なんて言われることも多い。川の歴史文化の深さなどの違いがあるもせよ、川で活動している人は世間一般の人から変わった人と思われていると感じる。内側への情報発信だけでなく、外側へ向けて無関心層に対してのアクションを行わなければ指導者は育たないのかなと、漠然と思っている。

●意見交換

- ・自己アピールすることで、魅力を伝え人を集めることが出来るのではないかと。
- ・100人に声をかけて1人しか来ないかも知れなくても声をかけなければ人は来ない。
- ・地域、学校の声があり活動に行けば何かが変わる、と思ってもらえれば続く。
- ・若手も初めから出来るわけではなく、子どもと一緒に教育を行っていくことで育ちはまっっていくのではないだろうか。
- ・企業との連携を行い、川作りを一緒に行い、いい川を作って川塾を行う。
- ・資金調達が出来ないがために、30代～40代がほとんどいない。

- ・ある程度プロ化してニーズを生んで報酬を得るか、ボランティアを集め経費をあまりかけずに行うかの二通りある。
- ・どちらにするにしても、どう魅力的な活動にしていくかということが一つ肝。
- ・指導者の資格を得た後何が出来るのか、取得後の不安がある人が多く、毎年研修を行って自身をつけてもらいたい。
- ・ここまで育ってきた歩みを継続していくには、自分が講座を受けたときの事を思い出して歩み続けなければ後退はしないはず。
- ・「活動をどう魅力的に行うのか」ということが重要。

●まとめ

- ・潜在的に興味のある人をどのように確保するか
- ・オールラウンダーを探すのではなく、プラスアルファ少し伝えるだけで現場に入れる人を探す
- ・人が集まるためには魅力的な何かが必要
- ・内部への情報発信だけでなく外部へのアクションが必要
- ・指導者の育成には時間と資金が必要不可欠
- ・川をトータルで理解できる人育成



第3分科会 「身近な川の防災」

コーディネーター：藤芳素生 氏（NPO法人川に学ぶ体験活動協議会）
北川淳一 氏（蘭越町防災担当）

●話題提供者：伊豆倉米郎 氏（NPO法人十勝多自然ネット）

ただいまご紹介をいただきました「十勝多自然ネット」の伊豆倉と申します。
持続可能な地域づくりという観点から防災等に繋がる話題のお話をさせていただきます。

活動内容としては持続可能な活動を行うための地域が必要です。地域協議会を作るために河川管理者、われわれNPOと教育機関は発掘、掘り出す活動をしています。地域協議会ができると環境問題も考えられる人材を育成できます。

2010年に立ち上げた時には建設環境研究所と覚書を交わして各地域に働きかけを行いました。その結果5つのフィールドで活動を行っています。実際に地域の人たちで「帯広川伏古地区子どもの水辺協議会」を立ち上げていただきました。そのお蔭でわれわれの活動が成り立っています。学校と地域とNPO、教育機関や河川管理者、コンサルタントと一緒にこのような活動を行っています。活動地域としては砂利原など住宅に近接する地域で活動を行っています。

環境教育や川流れの活動を行なっていますが、身近な川に対する理解ということで周辺の児童が帯広川に降りて様々が河川体験を通じての防災教育、個々の川に対する安全な関わりを理解していきます。河川活動を通じて地域住民と触れ合うことで大人の目で危険を日常的に川遊びに反映することができています。「子どもだけでは川へ行かない」「川で遊ぶときにはライフジャケットをつける」などがメインになっています。魚とりだけではなく、地元の川の歴史なども説明し、川流れをいろいろな場所で行っていますが、子どもたちはプールでは遊べるが実際に流れる川では遊べません。プールと川の違いを認識するようにしています。

①地域コミュニティができることによって、地域の住民が自らの生活で河川の草刈りや伐採など管理することで、河川環境や親水性が高まっていきます。

②日常的に地域の目で事前に危険箇所をチェックすることで治水安全対策が高まります。

持続可能な環境教育と言う形で活動を行ってきましたが、防災についても活動ができています。

●話題提供者：山本隆幸 氏（河川愛護団体リバーネット21ながぬま）

今、ご紹介に預かりましたリバーネット21ながぬまの山本と申します。

私達の団体は平成14年に設立されて14年が過ぎました。なぜ、子ども水防団活動で「自分の身は自分で守る」活動を行っているのか、なぜ、そこに重きを置いているのか？

会場に入る時にドアの前で皆さんにペーパーを配りました。事例発表ではみなさん映像を使っていますが、映像だと画面が切り替わると前の映像のことを忘れていきますので、あえてペーパーを配っています。その目的の一つは子ども水防団活動、自分の身は自分で守る活動を全国の方々にまねして欲しい。そして、例えば、先日の関東の茨城の大水害についても「水害はひどかったが、なくなった人は一人もいない」と言うことにしていただきたいと思います。

そのためにペーパーを作成して配っております、後で検証して活動をまねして欲しいです。

どんな町でも町の発展と川の関わりには歴史があります。資料を見て下さい、白黒の書面が6枚あります。長沼町の地域防災計画書からのコピーです。この中にきちんと載っていませんが死者数は60名いました。それだけ長沼は低地帯でこれだけの水害が発生しています。

平成25年の12時間雨量89ミリで道路冠水、農地冠水しました。毎日通っているスクールバスが道路冠水をして迂回をするくらいになりました。

我々の子ども水防団活動を始めるきっかけにつきましては最後から二枚目に記載されています。

14年前に小学校2年生、3年だった子どもたちが高校生、大学生になり新しく入って来た子ども

たちを指導しています。水防団育ちの子どもが将来は河川管理者になりたいと北海道大学に2名、河川管理者になるために勉強しています。

水害は無くなくとも、水害で亡くなる人をなくそうという信念で活動をしています。今後ともこの活動を続けて行きます。

●話題提供者：平山康弘 氏（NP0 法人川に学ぶ体験活動協議会）

名木野小学校では、平成16年に7・13水害で大きな被害を受けました。RACは自分の身は自分で守ることを川で行っているの、防災に生かせるのではないかと今回の活動と一緒にやらせていただきました。当時被災した人たちと同じ体験を学校で体験し、また、水害など怖い部分だけではなく楽しいプログラムも盛り込みました。大平森林公園の池でのEボートに乗り、Eボートを使って救助体験も行います。池の対岸に人に見立てたライフジャケットを置いて、それを救助してくるという体験をしています。また、他のプログラムでは見附レスキューなど消防署の方々の救助訓練、被災した水害の話や地域住民のお話しなど、夜まで勉強しました。食事はもちろん被災食で缶詰パンやアルファ米です。また、ハザードマップを使って自分たちの家がどのあたりにあるのか確認などもします。被災食で2日間過ごして子どもたちは帰宅した後、おかあさんの食事に感謝するようになっていました。

学校の防災スクールを行ってから地域や市で行う防災訓練に参加する子どもたちの参加率が高くなって来ました。

防災スクールについては、主にPTAが中心で行っています。見附市ではどこの学校に行っても、防災組織の方々や地域の人たちが運営協力してくれます。そのほか、プールに入ってスローロープ体験なども行っています。

自分たちの地域の防災倉庫の見学、リヤカーを使ったり、防災グッズの使い方なども勉強します。最後の日の炊き出しが子どもたちの一番の楽しみになっています。各学校独自のプログラムで小学校4年生、5年生の児童が全員参加で行っています。

●意見交換

質問：お二人にお聞きしたいと思います。説明の中で伊豆倉さんが産学官民の連携をすることで継続的な環境学習が行われているとおっしゃっていましたが、わが町蘭越町を考えると官が主導して、結果、行政の負担が重くてなかなか進まないことが実態です。いろいろな組織との連携がうまく行っている例をお聞きしたいと思っています。

答え：秘訣はありません。偶然にと言うか地域を掘り起こせたことが成功の一つであると思っています。地域に声をかけたら近くの川で何か活動をしたかかっていました。偶然地域の協議会を作っていただき、民が主導になると継続的にやっていくことができ、良い場所での環境教育で自分たちの身近体験を行いました。

- 1、活動は継続的に行う。
- 2、自分たちの周りの川をきれいにする。
- 3、治水効果の向上につながっていくと思います。

このような活動については偶然の産物であると思っています。なかなか他の地域ではできていないので難しいところもあると思います。

質問：事例発表の中で子どもたちから活動が楽しかったとの声が聞かれましたが、楽しくなければなかなか継続的に出来ないと思います。山本さんの立場として水防団の活動の中で子どもたちとの楽しい活動をさせるためにどんな思いで取り組んでいるのかお聞きたいです。

答え：肩書きは事務局長ですが、子どもたちと一緒に活動する時はガキ大将の親分です。子どもたちに「何がしたい」と聞きます。例えば、夕張川の活動では夕張川は土質で常に濁っていて川床が見みえません、だから訓練するには良いフィールドであります。水がとても冷たくて体が冷えます、そこで木炭を焚いています。子どもたちの要望で焚き火をしてソーセージを焼いたり、マシュマロを焼いたりして食べています。私が一番楽しんで活動していると思います。

質問：長沼の活動を見てすばらしいと思います。子どもたちの教育として学校教育、社会教育として町全体で動くようなことが必要であると思います。その関係をお聞きたい。

答え：今まで幾度と無く長沼町にはいろいろと行政に呼びかけていますが、今年長沼で水防演習がありました。リバーネットの子どもたちは水防演習で住宅浸水防止ということで土嚢積みを行いました。長沼町にせつかくの機会だから長沼の興味にある子どもたちも参加出来る様に学校や教育委員会に呼びかけをしました。町は「良い活動ですね」と言われるが各学校からは連絡がなく、学校は知らないみたいでした。今まで学校教育と一緒にやりたいと何回もアプローチをしました。学校教育と一緒にやりたいと言ってもなかなか学校へのアクセスができません。学校では前年に次の年のカリキュラムを決めて、それに無いものを後から入れるのは大変なのかなとも思いました。当分は集まっている40名の子どもたちと一緒にやっていくしかないのかと思っています。いろいろと行政や町の職員にも見に来て欲しいと呼びかけてもらったがなかなか見に来てはくれませんでした。

●まとめ

- ・ 学校側の考え方や仕組みなどを理解することが大切です。
- ・ 防災について考える、地域から全国へ発信にする。行政と市民の連携が大切です、
- ・ 行政や学校と連携するにはこまめに学校へく、パンフレットなどを配る、学校の考え勉強することが大切です。

出向
方の



■ 資料編 2・実行委員会・運営委員会・事務局名簿・会議開催状況

●実行委員会規約

制定：平成 27 年 4 月 1 日制定

「川に学ぶ体験活動全国大会 in 尻別川」実行委員会規約

（名 称）

第 1 条 本会は『川に学ぶ体験活動全国大会 in 尻別川実行委員会』（以下「実行委員会」と称する。

（目 的）

第 2 条 実行委員会は「川に学ぶ体験活動全国大会 in 尻別川」を成功裡に実施するため、円滑な企画・運営を行うことを目的とする。

（事 業）

第 3 条 実行委員会は前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- （1） 基調講演、活動事例発表会、全体会等の企画運営。
- （2） 体験活動の企画運営。
- （3） 交流会の企画運営。
- （4） 関連イベントの企画運営。
- （5） その他 大会の企画運営に関わる事項。

（委 員）

第 4 条 委員は関係河川管理者、地方公共団体、NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会及び河川をフィールドとして活動し、当大会に参加する諸団体ならびに流域貢献をすすめる企業、関連団体等をもって組織する。

- （1） 実行委員長を置く。実行委員長は牧野純二をあてる。
- （2） 副実行委員長を置く。副実行委員長はNPO 法人自然体験活動推進協議会代表理事をあてる。実行委員長に事故ある時は、副実行委員長がその職務を代行する。
- （3） 実行委員会に事務局を置く。

（監 事）

第 5 条 実行委員会に監事若干名を置き、会計処理を監査する。

（委員会）

第 6 条 実行委員長は、実行委員会を招集し、その議長となる。

- （1） 実行委員会は次の事項を審議決定する。
 - ① 事業計画や予算・決算に関すること。
 - ② その他重要な事項に関すること。
- （2） 実行委員会の議事は、出席者の過半数により決する。同数の時は議長がこれを決する。

（運営委員会）

第 7 条 実行委員会に運営委員を置く。運営委員会は下記の事項を協議・執行する。

- （1） 実行委員会に付議すべき事項。
- （2） 実行委員会の議決を要しない会務の執行に関する事項。
- （3） 実行委員会で決議した事項の執行に関する事項
- （4） その他実行委員会が必要と認めた事項。

（事務局）

第 8 条 実行委員会事務局は、「NPO 法人しりべつりバーネット」に置く。

（会 計）

第9条 実行委員会の経費は次をもってあてる

- （１） 参加費
- （２） 助成金
- （３） 寄付金、その他収入

2. 実行委員会の会計は、実行委員会発足の日から解散の日までとする。

（解 散）

第10条 実行委員会は、会計の最終処理をもって解散とする。

（雑 則）

第11条 この規約に定めるもののほか、実行委員会の運営に必要な事項は、委員長が実行委員会に諮って定める。

【実行委員会名簿】

役 職	氏 名	所 属
実行委員長	牧野 純二	NPO法人しりべつリバーネット 理事長
副実行委員長	久住 時男	RAC代表理事
実行委員	高橋 季承	国土交通省北海道開発局建設部河川計画課長
実行委員	町屋 安定	国土交通省北海道開発局小樽開発建設部俱知安開発事務所長
実行委員	北谷 啓幸	北海道建設部土木局河川砂防課 課長
実行委員	宮岸 亘	北海道後志総合振興局小樽建設管理部 部長
実行委員	山本 契太	ニセコ町企画環境課 課長
実行委員	前原 功治	ニセコ町商工観光課 課長
実行委員	工藤 達人	ニセコ町商工会 会長
実行委員	原 文宏	シーニックバイウエイ支援センター
実行委員	山本 隆幸	河川愛護団体リバーネット21ながぬま 事務局長
実行委員	妹尾 優二	一般社団法人 流域生態研究所 所長
実行委員	大内 雅司	岩尾内ダム水源地域 ビジョン推進会議ASOVI 代表
実行委員	千葉 利光	NPO法人 帯広NPO28サポートセンター
実行委員	新野 和也	NPO法人どんころ野外学校
実行委員	相田 準一	バイオブロック工法普及連絡協議会 会長
実行委員	森井 智江	NPO法人まち・川づくりサポートセンター 教育部長
実行委員	石黒 武美	NPO法人山のない北村の輝き 理事長
実行委員	高橋 慎	栗山町ハサンベツ里山計画実行委員会 事務局長
実行委員(監事)	志比川 武	ランコ・ウシ尻別川河川愛護の会 会長
実行委員(監事)	尾谷百合子	NPO法人水環境北海道事務局

【運営委員会名簿】

役 職	氏 名	所 属
運営委員長	南 重光	NPO法人しりべつりバーネット 理事
副運営委員長	安藤 正幸	NPO法人山のない北村の輝き 理事
運営委員	田中 和浩	国土交通省北海道開発局小樽開発建設部工務課長補佐
運営委員	成田 盛晃	国土交通省北海道開発局小樽開発建設部俱知安開発事務所河川課長
運営委員	萬谷 俊哉	国土交通省北海道開発局小樽開発建設部俱知安開発事務所流域計画官
運営委員	縄田 健志	北海道後志総合振興局小樽建設管理部 事業室長
運営委員	岡垣 久	北海道後志総合振興局小樽建設管理部 治水課長
運営委員	柴田 幹	北海道後志総合振興局保健環境部環境生活課 主幹
運営委員	桜井 幸則	ニセコ町企画環境課
運営委員	佐々木一茂	ニセコ町企画環境課
運営委員	齊藤 徹	ニセコ町商工観光課
運営委員	北川 淳一	尻別川連絡協議会事務局
運営委員	下田 伸一	ラフティング組合
運営委員	坂本 貴昭	NPO法人水環境北海道 理事
運営委員	佐藤 義久	NPO法人しりべつりバーネット 理事
運営委員	木下 裕三	ニセコグリーンツーリズム協会 代表
運営委員	平山 康弘	RAC
運営委員	斎藤 隆	RAC

【事務局名簿】

役 職	氏 名	所 属
事務局長	南 重光	NPO法人しりべつりバーネット 理事
事務局	佐竹 三郎	ニセコ町商工会
事務局	梅津 真平	株式会社ニセコリゾート観光協会
事務局(会計)	横山 喜貞	NPO法人しりべつりバーネット 事務局長

【運営スタッフ名簿】

氏 名
会田昭彦、佐藤裕子、志比川栄子、原田ひろこ、島 一雄、橋本 拓、西泉隆広、加藤 淳、 鈴木正昭、中井 浩、福島雅史、牧野由美子、横山宜枝、増田和人、日野信夫、田中清也、 山本英二、佐竹忠勝、中川俊之、三部 温、松田裕子、鹿討悟郎、小林智明、高井秀一、 ハガート純、得能万季、橘 昌憲、廣川 泉、中川麻衣、中村幸治、大坂博之、野嶽秀夫、 安藤道男、野口朋毅、佐々木泰訓、櫻庭悠輔、高田和喜、黒田保孝、解田哲雄

【準備会・実行委員会・運営委員会会議開催経緯】

大会の準備のため平成26年度より3回の準備会を開催し、平成27年度より実行委員会を立ち上げ3回開催、運営委員会を6回開催し、事業の運営にあたった。

会 議 名	開催日	会 議 内 容
第1回準備会	H26.11.5	RACとRAC全国大会についての説明、日程と会場、実行委員会と運営委員会の設立、大会までのスケジュール、予算等について
第2回準備会	H27.1.20	大会準備の進捗状況、大会プログラムの検討、宿泊、交通について
第3回準備会	H27.3.27	全国大会チラシ、名義後援依頼の最終確認、大会当日のスケジュール、分科会の内容確認、実行委員会、運営委員会の日程等について
第1回 実行委員会・運営委員会	H27.4.20	実行委員会、運営委員会を合同で開催した。RACおよびRAC全国大会紹介、の経緯・状況の報告、実行委員会の設立、大会基本コンセプト、予算、今後の日程、会場、基調講演、活動報告、分科会のテーマ等について
第2回運営委員会	H27.5.28	大会の周知内容（チラシ）及び周知（配付）方法、周知内容、配付方法、スケジュールと役割、活動発表団体、分科会、座長、記録、進行役、アドバイザー、とりまとめ役等の選定交流会、エクスカッションについて
第3回運営委員会	H27.7.9	大会当日の業務、分科会の実施方法等について
第2回実行委員会	H27.8.7	運営委員会の経過説明、実施計画書、参加申し込み状況等について
第4回運営委員会	H27.9.1	大会運営表、実施体制表、分科会案、参加申し込み状況等について
第5回運営委員会	H27.9.17	大会に当たっての最終確認
第3回実行委員会、第6回運営委員会	H28.2.12	大会の実施報告、大会実施報告書（案）について

●準備会・実行委員会・運営委員会の実施状況写真

準備会の写真



運営委員会の写真

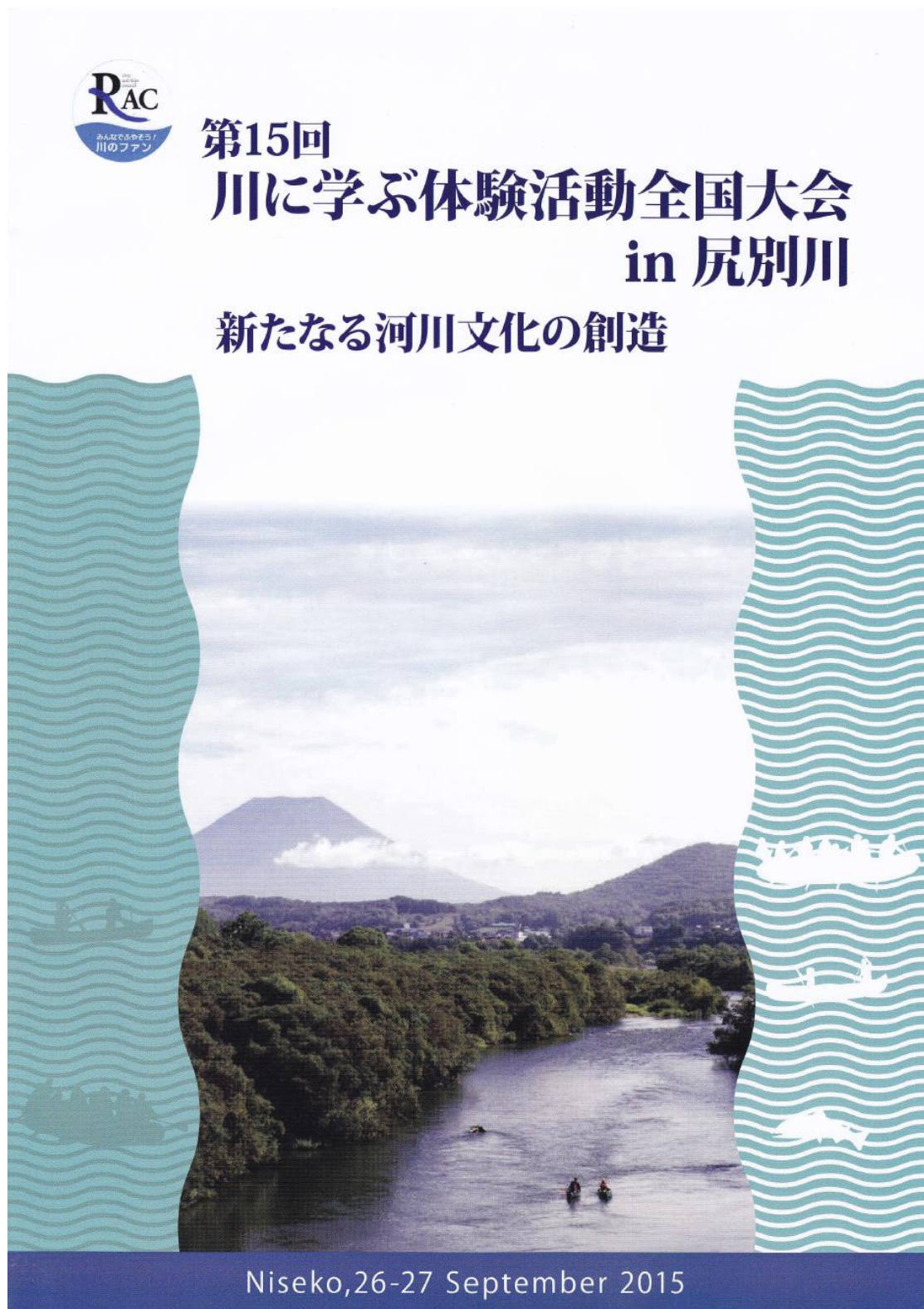


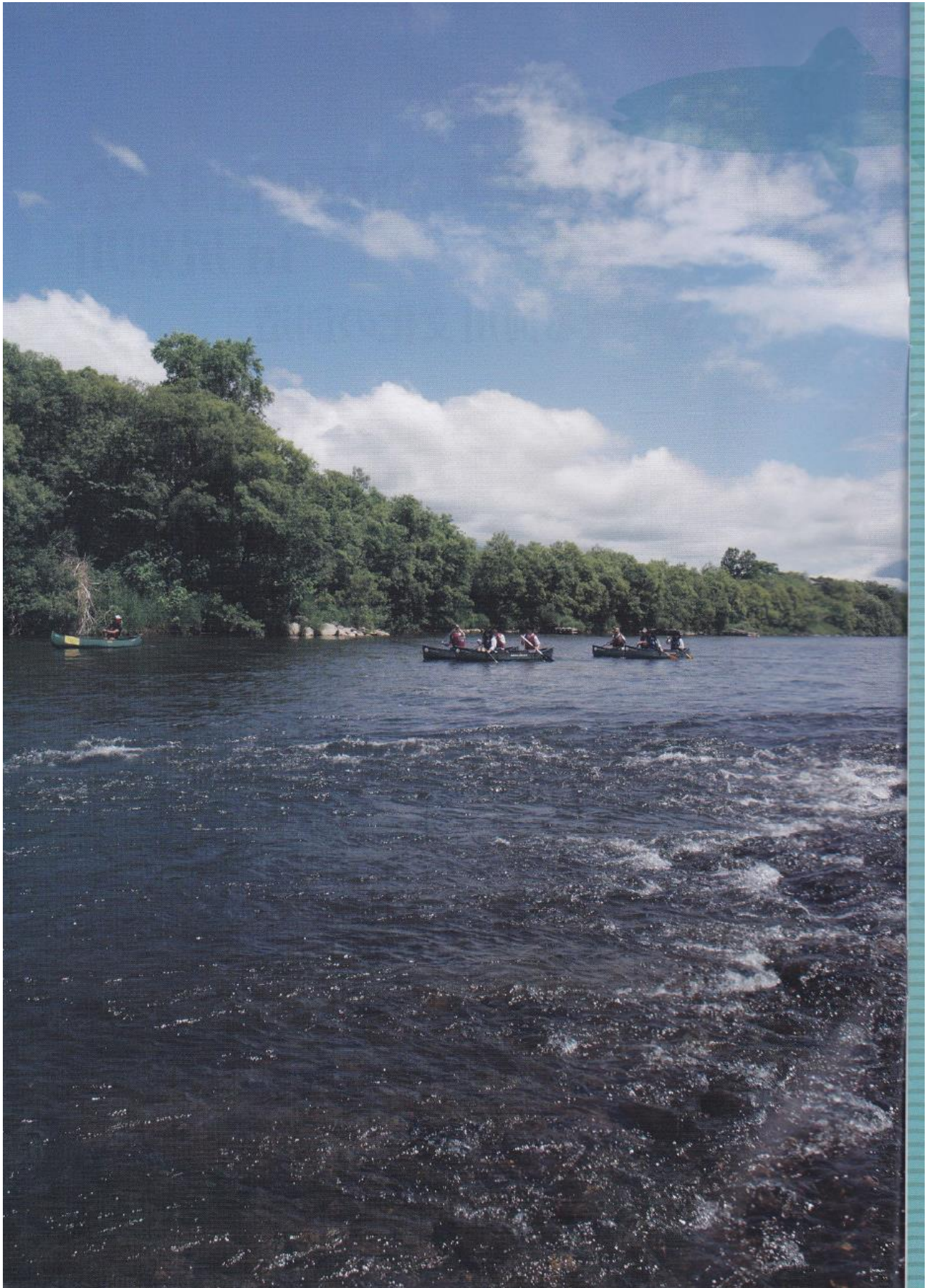
実行委員会の写真



- 大会当日参加者に大会プログラム（A-4 小冊子 p26）を配布した。

表 紙





開催趣旨

尻別川は北海道南西部を支笏湖の西に位置するフレ岳から日本海に注ぐ全長126kmの一級河川です。

5年連続通算14回水質日本一に輝き、国内最大の淡水魚イトウとアユが共存する豊かな自然を有しており、春にはサクラマスが遡上し、夏にはカヌーやラフティング、釣りなどのアウトドア活動が盛んに行われ、秋には鮭が遡上するなど魅力あふれる環境を地域に提供しています。

また、水辺の楽校や清掃活動、水質調査などの環境教育や、防災活動等の「川に学ぶ体験活動」も盛んに行われるなどして新しい河川文化も育ってきています。

その尻別川で、「第15回川に学ぶ体験活動全国大会」を開催します。「新たな河川文化の創造」をテーマに全国の川で活動している団体が集い、各地の川での「体験活動」を共有し、豊かな川文化の創造に繋げてまいります。

プログラム



基調講演

「新しい北海道の河川文化とは」

ロス・フィンドレー氏

(株式会社NAC代表)

(株)NAC ニセコアドベンチャーセンター代表取締役。オーストラリア・キャンベラ大学スポーツスタディー卒業。1995年3月ラフティングをはじめ、通年を通じたアクティビティを提供するNACニセコアドベンチャーセンターを設立。2008年にNAC札幌店/2012年NAC private cat resort/2015年NAC Ski Factory をオープンする。北海道のフィールドを活かしたアウトドアアクティビティを通して地域の魅力を引き出し地域の活性化につながればとの思いで常に新しい視点で「楽しさ」を発掘し続けている。

2004年にはニセコの夏の観光シーンに多大な影響をもたらした功績が認められ、国土交通省より外国人で初の観光カリスマとして観光カリスマ百選に認定。他にも多数の委員を務め、地域に新しいビジョンを送り込んでいる。

1

9月26日(土)

12:00 受付

12:30
開会式

開会挨拶
主催者挨拶
祝辞
開催地歓迎挨拶

13:00
基調講演

演 題
「新しい北海道の河川文化とは」

講 師
ロス・フィンドレー氏
(株式会社NAC ニセコアドベンチャーセンター代表)

14:40 活動報告

Aグループ

倶知安東小学校4年
手稲さと川探検隊
NPO法人 みずのとらベル隊

Bグループ

NPO法人まち・川づくりサポートセンター
東予環境グループ
ハサンバツ里山計画実行委員会
日野川流域交流会

Cグループ

尻別川の未来を考えるオビラメの会
一般社団法人 流域生態研究所
河川保護団体リバーネット21ながめま

16:00

分科会 第1分科会 進化する川遊び
第2分科会 川遊び指導者はなぜ育たないか
第3分科会 身近な川の防災

17:30

分科会報告・全体会・閉会式

18:30

交流会

会 場 大ホール
参加料 4000円
(当日参加可)

2

9月27日(日)

08:45 エクスカーション 集合

カヌー
ツーリング

会 場 尻別川(蘭越)
参加料 2500円
(定員30名)

ラフティング

会 場 尻別川(ニセコ)
参加料 2500円
(定員30名)

鮭遡上
ウォッチング

会 場 尻別川・目名川
参加料 1500円
(定員20名)

事例紹介 地元活動事例①

倶知安町立東小学校4年1組

山の川『尻別』は楽しい

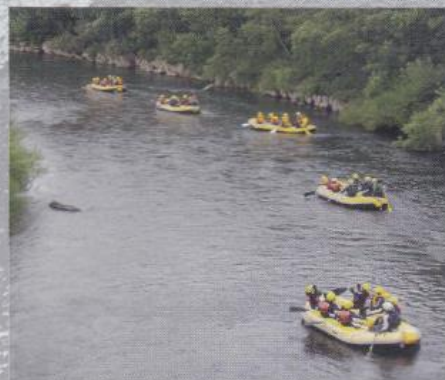
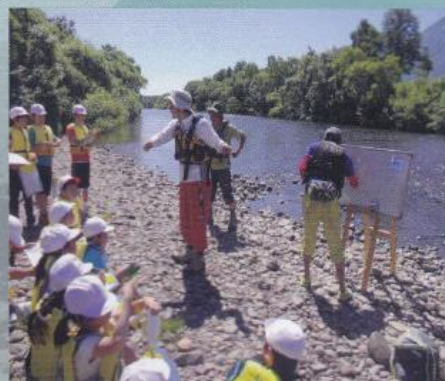
尻別川(中流域)

倶知安町立東小学校4年1組

子ども達が住んでいる倶知安町。そして倶知安町の真ん中を流れている尻別川。尻別川は、子どもたちにとって遊び場であり、日常生活に溶け込んでいる当たり前の存在である。

本校では、総合学習で地域の実態を把握し、そこにあるものについて問題を見付け出し、解決する学習を進めている。本校4・5年生は、例年、総合学習で尻別川を取り上げている。4年生では、実際に川に行き、NPOしりべつリバーネットのみなさんにご協力をいただき、水棲生物や昆虫、魚などを捕まえて、どんな種類が生息しているのかを調査した。そして、その生き物たちがきれいな水にしか棲めないことを学ぶことができた。また、農業用水や飲料水に使われている水のきれいさを実感することができた。そして4年生は、夏休みにはラフティングも体験してきた。

私たちの住む地域に生命と恩恵をもたらし、遊びの場にもなるこの「尻別川」を、子ども達は、彼らなりに守っていかなければならないという意識をもち始めたようである。



事例紹介 地元活動事例②

手稲さと川探検隊

市街地周辺部での親子自然体験活動

札幌市手稲区の小河川と手稲山麓の森林

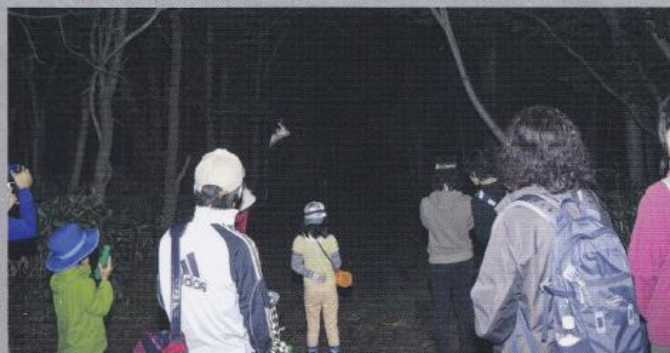
沼田 寛 手稲さと川探検隊 安全担当スタッフ

(RACリーダー、真駒内水辺の楽校事務局長)



手稲さと川探検隊は、2004年7月、地域の社会人スタッフと北海道工業大学(現:北海道科学大学)柳井ゼミの協力も得て設立。発足以来10年余り、地域の親子の自然体験の場づくりを主な目的として、手稲山から流れる川から海、その源流である手稲山の森をフィールドとし、子どもたちとかつて子どもだった親たち、地域住民らと共に自然の中に入り、生き物に触れ、遊び、感じ、癒され、育まれるよう、活動を展開してきました。

「傍らにある ざわめく自然が 感性を育む」との考えから、住宅地に残された自然である里川での水生生物、森の広がる手稲山での野鳥やコウモリ探しをはじめとする体験活動のほか、カエルの卵の分布を調べる生物モニタリング調査活動、森と木を知り感じる木育活動、森の恵みを食べたりなど、常にワクワクする自然と人とのかかわりの環を広げています。



事例紹介 地元活動事例③

NPO法人みずのとらベル隊

新たな河川文化の創造

熊本県、九州県内

RACトレーナー、CONEトレーナー

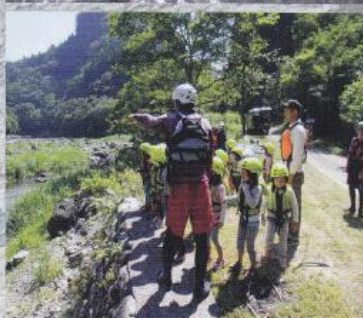
当団体では、河川整備基金を用いて行っている「水の安全教育幼児プログラム」について報告する。

当団体では幼児の川での体験活動が少ないことから、RACが制作した「ワル河童を探せ!」のDVDをもとに幼児でもわかりやすい劇を作成し、劇の上演で川の危険箇所等を説明すると

ともに、川でのPFDを使用した実体験をプログラム提供している。

地域の1保育園で始めた本プログラムは、今年で4年目となり、現在では地域15園中7園が参加する一大プログラムとなっている。

このように、現在新たな河川文化の創造に取り組んでいることを報告する。



事例紹介 地元活動事例④

NPO法人 まち・川づくりサポートセンター

みんとち自然体験楽校

石狩川流域及び周辺の自然

NPO法人まち・川づくりサポートセンター 教育部長 森井 智江

私たちが住む滝川市は、石狩川と空知川との合流点に位置し、豊かな自然に囲まれています。「みんとち自然体験楽校」(※みんとち:アイヌ語でカッパの意)では、子ども達が身近な川や自然を題材に様々な自然体験活動を通して、環境問題に気づいたり環境保全への関心を高めたりするきっかけになればと考えています。具体的には、「石狩川再生の森」や石狩川周辺の自然観察、Eボートで石狩川の川下りや川流れ、水生生物の観察など、地域の特性を活かした活動を行っています。また、石狩川を中心とした四季の自然変化やそこに生息する動植物との触れ合いを通して、豊かな人間性や感性を育むこともねらいとしています。さらに、自然体験活動を通して、友達同士の人間関係や世代間の交流、失敗してもあきらめずに何度でも挑戦することなど、学校教育では時間をかけることができない分野への体験を通して、子ども達が自ら気づき成長していくことを支援していきたいと考えています。



事例紹介 地元活動事例⑤

ハサンベツ里山計画実行委員会

RAC講習フォローアップタ張川の指導者講習会

タ張川流域（北海道由仁町、栗山町、南幌町）

坂本貴昭

いきもの豊かな里山づくりとタ張川流域の川体験活動の展開のための指導者養成のとりくみ

当会は、タ張川支流のハサンベツ川を舞台に地域住民が主体となり町役場、企業、関係団体と連携しながら、里山づくり（田んぼづくり、生物調査、環境学習、交流拠点づくり、植樹、多自然川づくり等）を進めています。ここ10年は、ハサンベツ川的环境保全のためには、本川であるタ張川的环境保全も大切との観点から、タ張川サケマス回帰活動と魚道の設置、生き物調べや川下りなど環境学習のフィールドとして積極的利用を進めています。タ張川流域では、当会のほかにも複数の団体が川を使った様々な活動を行っており、栗山町周辺のタ張川中流域だけで、年間約50回の川活動があります。これら活動を楽しく安全に行っていくためにも、人材育成が急務となり、平成21年に当会の呼びかけで流域の有志が、RACの講習会を開きました。以後、「反復実習が大切」との考えから毎年講習会を自主的に開催しています。（平成23年度は中止）講習会では、自然河川の本来の姿と働きを理解し、改修河川との違いがどこにあるかを学ぶこと、また川の怖さと楽しさをできるだけ体感するようにしています。指導者が「教師」ではなく、「ガキ大将」になること、自分の力量をしっかり押さえて、力量以上のことはしないことなども講習の基本にしています。



事例紹介 地元活動事例⑥

日野川流域交流会

プロジェクト「リバビズ大学in日野川流域交流会」

大学、行政、企業・店経営者、流域住民など

環境文化研究所 CRO 田中 謙次

「リバビズ大学」。リバービジネスをキーワードに少子化定住化対策に挑むプロジェクト。これまで里川として生活の一部であった川、現在は生業としていることが少なくなった。反面、せせらぎや癒しによる効果が人に与える影響は大きく、精神的・肉体的な健康改善にも期待が高まる。そのような中、リバビズ大学では、大学、経営者そして川を愛する多様な人とイノベーションによる新たな職業創造し、新たな河川文化を展開している現状についてご報告します。

【実績】

- リバビズ大学 研究「観光資源としての川の利活用調査研究」
- リバービジネス「おしゃれなリ・BAR」の実績と行政活動
- 足羽川ミッション会議



リバービジネスを推進するチラシ



中心市街地を流れる川の利活用実験

事例紹介 地元活動事例⑦

東予環境グループ

鞍瀬川・中山川 親子川遊び講座

2級河川中山川と支流鞍瀬川

高須賀友哉と藤原美紀、身体障害者手帳つながりの二人です。
バリアフリーの社会の実現を目指して行動中。

初めまして、愛媛からやってきた、東予環境グループです。東予環境グループは、1990年4月に愛媛生協の組合員活動として発足しました。市民団体「周桑・いのちの樹」の9つの専門部会と勉強会のうちの一つです。それぞれがお互いに協力しながら、独自の活動を続けています。

市民団体「周桑いのちの樹」は、「住民主導による住民参加」を続けてきました。現在、県内、県外を含めて産・学・官・民約250名に案内を送っています。そのなかで、東予環境グループは、自然及び社会環境について、調査・分析を行い、保護・保全を進めていくことを目的に活動しています。現在は、愛媛県内での自然再生の取り組みを進めています。

今年から、新しく取り組みを始めたのが、水難事故の防止です。私たちが主に活動している西条市では、昔から水難事故が発生していました。事故が起きているのは、加茂川だけです。高校生が相次いで亡くなった取水堰の取水口では、10人以上の人がなくなっています。

このような水難事故が相次ぐ背景には、愛媛県内の川はほとんどが平野部では伏流しており、水が流れていないのが当たり前ということがあるのかもしれません。もう一つは、子どもたちが川で遊ぶことがなくなったということです。松山河川国道事務所では、重信川上流で、「川で学び隊」というイベントを行い、川の特長や危険箇所について子供たちに知らせています。そこで、私たちも勝手知ったる鞍瀬川を会場に今年度から「親子川遊び講座」を開催することにしました。

最後に、次の水難事故を防ぐために原因を調べ、提言を行う水難事故調査委員会の設置をお願いいたします。



事例紹介 地元活動事例⑧

尻別川の未来を考える「オビラメの会」

絶滅危惧種尻別川イトウの保護増殖

尻別川流域

オビラメの会会員 川村 洋司

尻別川の未来を考える「オビラメの会」は、絶滅危惧種イトウの分布南限である尻別川イトウ(オビラメ)を護るために、流域のイトウ釣師たちと研究者によって1996年に結成されたN G Oです。その目的を遂行するために、2001年に「オビラメ復活30年計画」をたて、以来今年で15年、尻別川産イトウ親魚から得られた人工授精稚魚の試験放流や、魚道設置をはじめとする産卵河川環境の保護育成、イトウ保護へ向けた流域住民への啓蒙活動などに努力してきました。その結果2010年以降継続して尻別川流域では20数年ぶりの天然由来親魚の自然産卵が確認されるとともに、2011年からは当会放流稚魚由来親魚の回帰産卵が確認されるようになり、オビラメ復活への確実な兆しが見えてきました。今後当会ではこれらの成果を尻別川全流域に広げるための活動を準備しています。



子供と一緒に稚魚放流



放流河川への魚道設置



放流由来親魚の産卵

事例紹介 地元活動事例⑨

一般社団法人流域生態研究所

“川”という自然を通しての人間教育 『かわ塾』

全道

流域生態研究所 妹尾 優二

現在の学校教育は、社会情勢の影響で半強制的な教育、すなわち知識だけが先行する。教育で何か足りないものがあることから、かわ塾では、学校では教えない人間教育、人生の中で最低限必要な道徳、どんな苦勞にも耐えられる忍耐力と知恵を“川”という自然を通して学ばせることを目的に活動を行っています。

内容

①川のしくみ・・・自然河川と改修河川の違い

川の流れの違い(速い・遅い・深い・浅い)

②川の恐ろしさ、楽しさの体験

③川歩き・魚捕り・川流れ・カヌー・ボートなどの体験

④川の生き物・川周辺の動植物を知る、そして食べる

このようなことを体験してもらいながら人間教育を行う。

評価は、学校や親から高く、人気の活動となっている。



事例紹介 地元活動事例⑩

河川愛護団体 リバーネット21ながめま

「子供水防団活動」 自分の身は自分で守る

石狩川水系 夕張川

山本隆幸

河川愛護団体 リバーネット21ながめま事務局長 解田 哲雄

五十嵐陸斗 (小4) 大森竜馬 (小4) 木村夏海 (小4) 大森瑠花 (小2)



災害弱者となりうる子供が棒を持って水の中を歩く、「水中歩行訓練」や実際に川に流される「川流れ体験」などの体験活動を通じ、水害時の術や判断力を養っています。また、土のうづくりや積み方も学びいざという時に備えています。水害時に棒を持って水深を探りながら歩くことで、「水の深さや進路が解り、安全な避難路の確保が容易にできる」、また、長靴での避難は靴に水が入ることにより、重き歩きづらくなり避難時には向かないので「紐のついた運動靴が向いている」ということを体験を通して学ぶことが出来ました。土のうづくりでは家庭にあるレジヤシート・ポリタンク・プランターを使って簡単土のうづくり方も学び、身近にあるもので創意工夫をして自分の身は自分で守るという体験学習をしています。



第1分科会 『進化する川遊び』

コーディネーター：宮尾 博一(NPO法人川に学ぶ体験活動協議会)
新野 和也(NPO法人どんころ野外学校)

目的 高度成長期に断絶した川遊びは、川環境の意識の高まりと共に再び活発になってきたと言える。新しい活動や装備・道具、安全対策が開発され受け入れられる現在を、川遊びの新時代に向かう過程ととらえ、川遊びはどう進化していくのか、われわれはどう関われるのかを検証する。

分科会①ー1

〔話題提供〕 小河原湖自然楽校／相馬 孝
小川原湖（高瀬川流域）

「ガサガサから自然観察記録用アプリへのつながり」

自然観察用マップアプリ

インターネット対応の環境学習用マップアプリを用いて五感による「水辺すこやか調査」を行った結果、マップアプリ上でのデータ、地理情報の可視可と毎年のデータ蓄積により水環境学習の評価に有効であることが明らかになった。



児童記入の観察ノート

今までは観察記録を壁新聞として張り出していたが、観察ノートから児童がPC入力を行い、電子データ化することにより、小学校内にある電子黒板での表示が出来るようになり、記録のデータベース化が図れた。



第1分科会 『進化する川遊び』

レーダーチャート

水環境健全性指標による地点別の環境評価をレーダーチャートにすることにより、データそのものを視覚で確認でき、理解することにつながる。

今後の活用

個人的な活用としては、環境情報図の作成に向け、RACとしては、全国の川情報（水遊びポイントや危険箇所等）の公開などに役立てると思う。

この応用範囲については、大学側から協力の申し出を受けている。



図2 地点別の「水辺のすこやか調査」結果



図3 年度別の「水辺すこやか調査」結果

分科会①ー2

[話題提供] TERRA子野アドベンチャー／原田 秀夫

熊本県・南阿蘇村 白川 他

「進化する川遊び」

- ①TERRA子野アドベンチャーの活動が10年前から保育園の子供たちをライフジャケットを着用し、川での流れ方を学びアクティビティに遊ぶ。
- ②4年前からプールでの浮いて待てのトレーニング
- ③地元ロータリクラブとのコラボ企画で、年に一度のDポート大会を開催
- ④小学生と親子キャニオニングを行っている。
- ⑤中学生 高校生の修学旅行の中でキャニオニングと滝壺でのラベリングを行っている。

第2分科会 『川遊び指導者はなぜ育たないか』

コーディネーター：北川 健司(NPO法人川に学ぶ体験活動協議会)
湯浅 芳和(NPO法人まち・川づくりサポートセンター)

目的 川に学ぶ活動を継続するのに問題となっている指導者不足と活動資金不足について、解決策を考え、指導者育成の問題だけではなく、未来に向けた川に学ぶ体験活動のありかたを模索する。

分科会②-1

〔話題提供〕 帯広NPO28サポートセンター／千葉 利光

十勝管内河川 帯広川・札内川・十勝川・利別川・本別川・芽室川・その他)

「川の指導者はなぜ育たないのか?」

活動を継続していく上で、課題になりやすいのが資金と人材の不足である。

資金面では十年前と比較すると、各種助成金や補助金の金額が減っている傾向にあり、それらに資金源を依存している市民団体は、活動の継続が危ぶまれる状況である。

人材面では、川で活躍するメインの人材の高齢化が課題となっている。高齢化により、身体的に活動を引退していく方も多い。一方、その減少分を賄うのに必要な、新たな人材の確保にはなかなか至らない。

したがって、川の指導者が育つために必要な「仲間」と「資金」の確保が困難である現状がある。

今年度、NPO28では、これら2つを解消し、さらに親水・環境美化・安全向上の効果があると期待している、「530+river」と「プレイパーク+リバー」のテストを実施しました。この2つの事例について、お話をさせていただきます。



第2分科会 『川遊び指導者はなぜ育たないか』

分科会②-2

[話題提供] NPO法人水環境北海道／坂本 貴昭／千歳川流域
「指導者育成について」

現代人は、普段川とかけ離れた生活をしている(川と付き合いなくても豊かな生活ができる)ため、川に関心のある人は、ほんの一部の人でほとんど人は関心がない。

世代的に見れば、60歳代から下の若い世代は川で遊んでない、川に親しみ、興味がない。

こうしたことを踏まえて、まず川に関心を起こさせるような、川の大切さを再認識させるような動きを「大多数の川に無関心な人達」に向けてしていないと、指導者育成の土壌というか、裾野が広がらない。

指導者と言われている人は、ある分野の専門家であるが、他の分野のことはわからない、興味がないという人がほとんどで、トータルで川のことを理解し、指導できる人は、全国的に見ても、おそらく妹尾氏以外にいない。つまり指導できる人材がないという現実がある。

川の持つ多様性を考えると、ひとつの分野の専門家では、川の指導者にはなりえない面がある。だからといって誰もがすぐにオールマイティの指導者になれるわけではないので、自分の専門性を中心に他分野にも関心を持ち、相互の関連性やつながりを認識しながら川の多様性を理解する必要がある。

川が今どういう現状なのか。上記の自分の専門分野以外の事柄に目が向くようになれば、川の意外な現状が見えてくる。年々、川的环境がますます劣化し、生態系が壊されていること、川遊び、川の活動のできる場所がどんどんなくなっていることに気づいていく。指導者は、変わっていく川の現状をしっかり把握しておかなければならない。

第3分科会 『身近な川の防災』

コーディネーター：藤芳 素生(NPO法人川に学ぶ体験活動協議会)
北川 淳一(蘭越町総務課)

目 的 住民やNPO団体等による河川愛護活動など、身近な川に親しむ活動を通して、水害に対する防災活動や避難活動を学び、河川環境の整備や保全等の取り組みについて模索する。

分科会③-1

【話題提供】 NPO 法人十勝多自然ネット／伊豆倉 米郎
十勝川水系 帯広川 下流域
「持続可能な地域づくり(環境・防災)」

継続的な環境教育を行うには、地域（町内会・PTA等）との連携が必須となる。そこで下図のような支援体制の枠組みを考え、町内会を中心に「帯広川伏古地区子どもの水辺協議会」を結成して頂いた。多組織（産学官民）が連携することで、継続的な環境教育が可能となった。

地域防災の拠点として

1. 河川事故の予防
 - 1) 周辺の児童が帯広川において、様々な河川体験を通じての防災教育により、個々の「川」に対する安全なかわりを理解する。
 - 2) 河川活動を通じて、地域住民と触れ合うことにより、「大人」の目での危険回避が日常的な「川遊び」に反映させることができる。
 - ①子供だけでは川に行かない。
 - ②川で遊ぶときにはライフジャケットをつける。
 - ③子供だけではなく、若い親とも意思疎通ができる。
2. 治水効果の向上
 - 1) 地域住民が自らの生活場所周辺の河川環境を、草刈、伐採等で管理することにより、樹林化による治水効果の低減を回避することができる。
 - 2) 日常的に、地域の目で河川と触れあうことにより、流下阻害箇所、異常洗掘等の危険箇所を事前にチェックすることができ、治水安全対策の巡視効果が高まる。



十勝多自然ネット
建設コンサル

プログラム作成
実施時支援



小学校
(幼稚園・保育園)

水辺体験学習主催



河川管理者
教育委員会

プログラム支援
学校との調整



地域協議会

実施時支援
実施箇所維持管理

第3分科会 『身近な川の防災』

分科会③-2

〔話題提供〕 河川愛護団体 リバーネット21ながめま／山本 隆幸
石狩川水系 夕張川
「自分の身は自分で守る」

長沼町は水害の多い町です。水害の歴史を学び、いざというときは“自分の身は自分で守る”をテーマに地域の子どもたちと以下のような防災活動を実施しています。

子ども水防団訓練実施

水害時に自分の身は自分を守るための水中歩行訓練や川流れ体験のほか、土のう作りと土のう積み訓練、ロープワークなどを実施。



親と子協働の森づくり植樹会、「道民の森」植樹

祭、道民森づくりネットワークの集い等に参加
植林活動に積極的に参加し、森の保水力を向上
させ水害防止に役立てます。



講演会の開催

長沼の川や運河の歴史のお話を聞き、度重なる水害の歴史を風化させないように、世代間交流を通して過去の水害体験を語り継ぎます。



2

エクスカーション ご案内

各エクスカーションにご参加の方につきましては、9月27日8時45分までにニセコ町民センターへお集まりください。そこからバスで活動場所まで移動します。

ニセコ町民センターの2階研修室5と和室羊蹄が荷物置き場&更衣室になります。(P26参照)

更衣室、荷物置き場は8:30より使用可能ですが、カヌー、ラフト参加の方はなるべく川下りの服装でお越しください。雨天決行ですが、やむなく中止になった場合はバスツアーを予定しております。

① カヌーツーリング



<安全上の注意>

・乗船前にカヌーの操作法、落水時の対処法、ライフジャケットの装着確認など事前レクチャーを行います。

・カヌーは2名乗りです。ペアは参加者同士で作っていただき、インストラクターは別のカヌーと一緒に下りながら安全確保を行います。

・カヌーは安定性の高いものを使用し、比較的穏やかな下流域で行いますが、転覆することもありますので、濡れたら困るもの、貴重品は持ち込まないようお願いします。

<お持ちいただくもの>

・シューズ(濡れても良いリバーシューズ等)/着替え/タオル類/保険証/濡れても良い服(速乾性のものが望ましい)/飲み物等

<その他>

エクスカーション終了後の着替えを持参してバスにご乗車ください。ゴールに着替え用の TENT を用意しております。

① 鮭遡上ウォッチング



<安全上の注意>

整備されていない川原や堤防上を散策し、鮭が産卵のため遡上する姿を身近で見学し、また、コンクリート護岸近く鮭の捕獲施設での見学を行いますので、歩きやすく滑りにくいシューズ等を履き、危険箇所には近づかないでください。

服装は、ハイキングの感じで構いません。

川原は、浅瀬ですので、産卵床を見学するため、ウエダーを用意しますが、滑りやすいので転倒には注意してください。

なお、安全確保のため、同行者を配置しますので指示に従ってください。

<お持ちいただくもの>

・シューズ(運動靴等)/帽子/タオル類/保険証/飲み物等

<その他>

・トイレ等は、近くに公衆トイレ及び町有施設「フィッシュ&名駒」が利用可能です。

① ラフティングツアー



<安全上の注意>

- ・乗船前にパドルの操作法、落水時の対処法、ライフジャケットの装着確認など事前レクチャーを行います。
- ・ラフティングは6名乗ります。速やかな班分けにご協力下さい。
- ・担当ガイドが1班に1人同乗しクルーに漕ぎ方を指示して全員で協力して川を下ります。
- ・ゴムボートは安定性の高いものを使用し、比較的穏やかな下流域で行いますが、落水や水しぶきが掛かることも予想されますので、濡れたら困るもの、貴重品は持ち込まないようお願いいたします。

<お持ちいただくもの>

- ・着替え/タオル類/保険証/濡れても良い服（速乾性のものが望ましい）/※ツアー写真購入希望者は現金をお持ちください。¥300/一枚

<その他>

- ・エクスカーション終了後の着替えを持参してバスにご乗車ください。
- ・バスで5分程移動しての施設に立ち寄り装備着用後、再度バスで5分移動し出発点に向かいます。
- ・参加者1人に一枚ずつ「参加申込書」の記入が必要です。事前に記入し当日持参してください。
- ・ツアー中に陸上からカメラマンが写真撮影をします。一枚300円での販売となりますので購入希望の方は現金の用意をお願いします。
- ・所要時間、全行程で1時間30分を予定しております。バスに乗る前に町民センターにてトイレを済ませておいてください。

NPO法人川に学ぶ体験活動協議会(RAC)の発足の経緯と全国大会

川に学ぶ体験活動協議会(River Activities Council 略称:RAC)は、川での体験活動を支援・推進するあらゆる活動を、時代に合わせて総合的に展開していくために、川をフィールドにして活動している各地のNPO法人・市民団体が参加し、2000年9月に設立され、2005年12月にNPO法人として登録した協議会です。

活動の目的

RACはNPO法人の定款において下記の通り活動目的を定義しています。

地域の振興には健全な流域の発展が不可欠であるという認識に立ち、これを構成する流域の歴史・風土・自然・生活・文化等とおして、地球環境の根幹ともいえる水循環を担う「川」を理解する「川に学ぶ」という理念のもと、川及び水辺での継続的な体験活動とそれを支える「川の指導者」を育成する他、この活動の普遍化に向けて産学官民の連携のもと様々な分野や地域を越えた交流や支援を行い、同時に円滑な活動を推進するために必要な調査研究や普及啓発を図り、もって良好な河川・水環境の保全及び創出に寄与することを目的とする。



上記定款の目的に賛同する全国各地の市民団体や各種組織や有志により、先に制定された川に学ぶ理念を柱として指導者養成や各種普及活動等を全国各地で展開しています。

設立の背景

1997年には河川法が改正され、1998年6月、河川審議会「川に学ぶ小委員会」がまとめた「『川に学ぶ』社会をめざして」という答申が出されました。この答申では、「古来より、人は川の流れと共に暮らし、川を愛し、川から多くのことを学んできた。それは川が豊かな恵みをもたらす、交通・交易の場として人々の生活を支えてきただけでなく、人間の心性に関する文化を育んできたことの現れである。川とのつながりを取り戻し、川に学ぶ社会を創造すること。それはすなわち近代が生み出した地球規模の環境問題や私たちの心の危機を乗り越え、真に幸福な次期文明を探ることにつながる。なぜなら、川とは自然の生態系であると同時に、流域という共同体や生命のつながりそのもの。川に学ぶ社会を創造するため、まずは、川の魅力とその本当の姿、川の作法を守ってきた先人の知恵を広く多くの人に伝えることが大切」と提言されています。

当協議会(RAC)は、当該答申をきっかけとして2000年9月に設立されました。それまで各地域の実情に合わせて展開されていた指導者養成活動をメンバーが持ち寄り、各地域の独自性を尊重しつつも共通理念に基づいたカリキュラムをつくりました。そして、川での安全で楽しい活動を普及し、川の危険性や川と人との繋がりを正しく理解し伝えることのできる「川の指導者」の養成を全国各地で展開することとなりました。

全国大会の開催

(川に学ぶ全国交流会・川に学ぶ体験活動全国大会)

川に学ぶ社会を全国各地域に広めることを目的とする当交流会は、平成10年度から平成12年度までは国主導で実施されてきましたが、平成13年度からはRACの構成団体を事務局に、民間主導で開催されるようになりました。

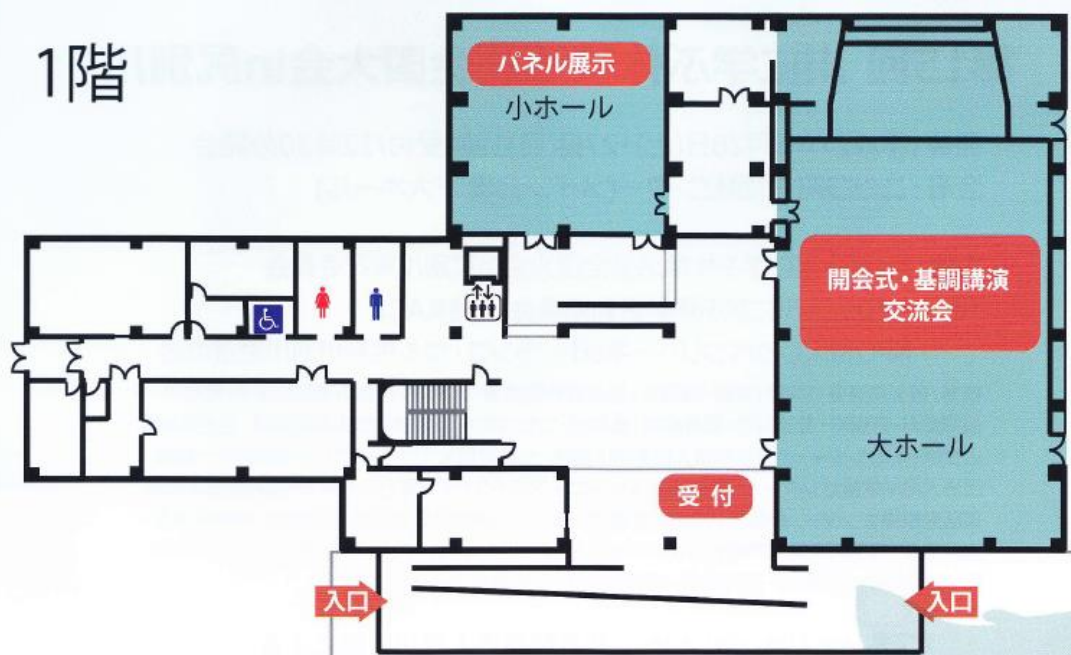
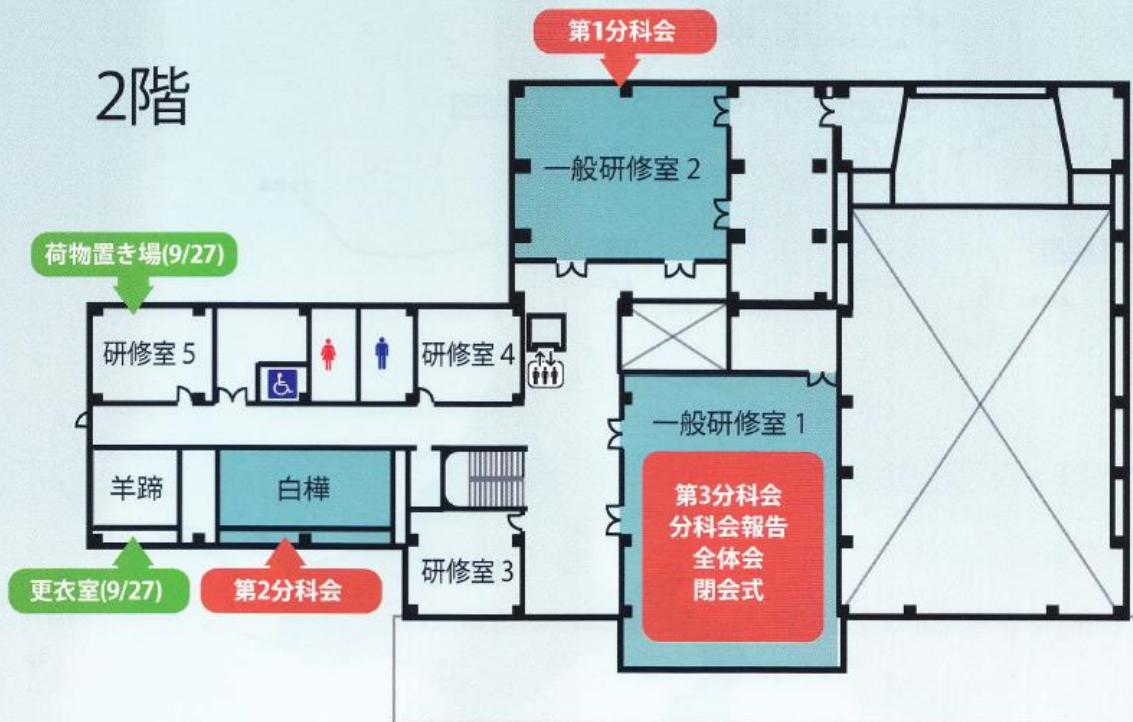
開催地の会員団体が主体となり、開催地及び開催地の関係機関のご協力をいただきながら開催させていただいております。

平成26年まで下記のような河川・流域で開催し、開会式では、国土交通省、開催地の知事、市長などからも毎回ご挨拶をいただいております。

開催年	開催地・河川、流域
平成13年(第1回大会)	岡山県岡山市 旭川
平成14年(第2回大会)	福岡県北九州市 紫川
平成15年(第3回大会)	徳島県徳島市 吉野川
平成16年(第4回大会)	福井県武生市 日野川
平成17年(第5回大会)	福島県会津若松市 阿賀川
平成18年(第6回大会)	東京会場
平成19年(第7回大会)	岐阜県岐阜市 長良川
平成20年(第8回大会)	熊本県熊本市 緑川、白川、球磨川、菊地川
平成21年(第9回大会)	広島県広島市 太田川
平成22年(第10回大会)	鹿児島県薩摩川内市 川内川
平成23年(第11回大会)	神奈川県横浜市 鶴見川流域
平成24年(第12回大会)	岩手県盛岡市 北上川流域
平成25年(第13回大会)	新潟県見附市 信濃川流域
平成26年(第14回大会)	宮城県延岡市 五ヶ瀬川

第15回 川に学ぶ体験活動全国大会会場

ニセコ町民センター案内図

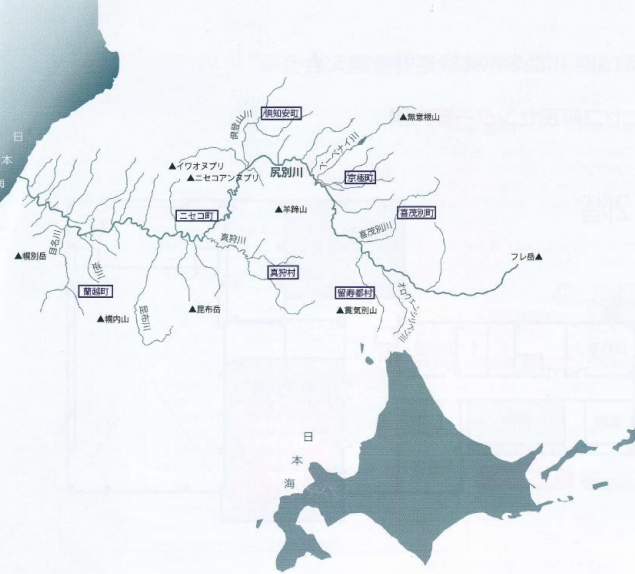


協賛者一覧

	
	
	
株式会社佐々木組	
牧野工業株式会社	
株式会社本間商店	
株式会社ニセコリゾート観光協会	
ニセコ昆布温泉ホテル甘露の森	
	
丸和農産株式会社	
ニセコバス株式会社	
北海信用金庫ニセコ支店	株式会社志田建設

	
日本最大のカヌー専門SHOP http://store.clearwaterkayaks.com/	
ミルク工房(株式会社高橋牧場)	
株式会社リブテック	
株式会社ケージー技研	
株式会社北開水工コンサルタント	
株式会社北海道技術コンサルタント	
日測技研株式会社	
共和コンクリート工業株式会社	
株式会社福田水文センター	
八千代エンジニアリング(株)北海道事務所	
ニセコチーズ工房有限公司	
株式会社泰進建設 建設事業本部 ニセコ営業所	
ニセコライオンズクラブ	

裏表紙



第15回 川に学ぶ体験活動全国大会in尻別川

開催：平成27年9月26日(土)・27日(日)12時受付/12時30分開会
会場：ニセコ町 町民センター(メイン会場1F大ホール)

主催：第15回 川に学ぶ体験活動全国大会in尻別川実行委員会
共催：NPO法人川に学ぶ体験活動協議会(通称RAC)

NPO法人しりべつリバーネット・ランコ・ウシ尻別川(河川)愛護の会
後援：国土交通省・文部科学省・環境省・後志森林管理署・北海道・尻別川連絡協議会(蘭越町・倶知安町・京極町・喜茂別町・留寿都町・奥尻町・ニセコ町)・公益財団法人河川財団・子どもの水辺サポートセンター・公益社団法人日本河川協会・公益財団法人リバーフロント研究所・一般財団法人河川情報センター・一般社団法人シーニックバイウェイ支援センター・一般社団法人北海道開発技術センター・伊藤組100年記念基金・NPO法人自然体験活動推進協議会・寿都町漁業協同組合・尻別川漁業協同組合・NHK・HBC・STV・HTB・UHB・TVH・ラジオニセコ・北海道新聞・朝日新聞・毎日新聞・読売新聞・北海道通信・北海道建設新聞

 Our Life, with River 公益財団法人河川財団による
河川整備基金 河川整備基金の助成を受けています

●町民センターの外観と玄関



●受付状況



●地元ニセコ町商工会による地酒などの物産展



地酒の試飲もあり
ました。



●北海道環境財団の書籍販売コーナー



●河川財団PRコーナー



●妹尾優二 写真展（魚類）



●開会前の懇談



●小ホール（132 ㎡）で、河川管理者の啓蒙パネル展示や北海道各地域で活動している団体から活動パネル展示を行い、大勢の参加者の反響を得ました。

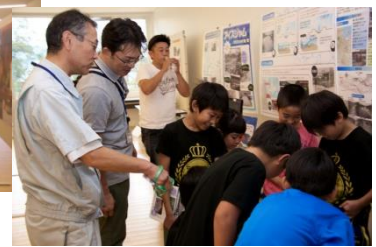
＜展示団体＞

北海道開発局、小樽開発建設部、北海道小樽建設管理部、寒地土木研究所、倶知安町立東小、n p o 法人しりべつリバーネット、n p o 法人山のない北村の輝き、n p o 法人まち・川づくりサポートセンター、流域生態研究所、リバーネットながぬま21、バイオブロック普及連絡協議会

●パネルの設置

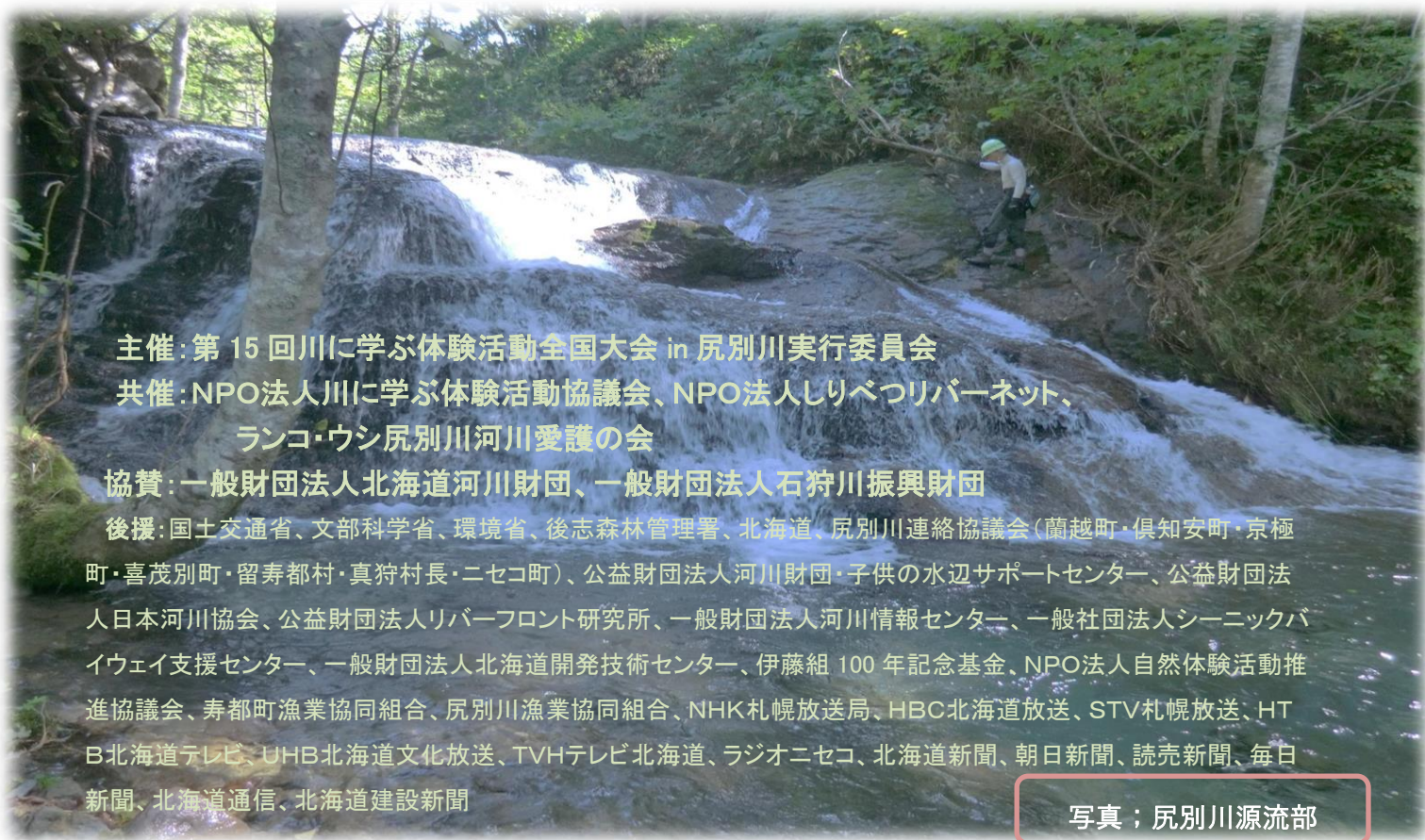


●パネル見学





写真；蘭越町を流れる尻別川と羊蹄山



主催：第 15 回川に学ぶ体験活動全国大会 in 尻別川実行委員会

**共催：NPO法人川に学ぶ体験活動協議会、NPO法人しりべつリバーネット、
ランコ・ウシ尻別川河川愛護の会**

協賛：一般財団法人北海道河川財団、一般財団法人石狩川振興財団

後援：国土交通省、文部科学省、環境省、後志森林管理署、北海道、尻別川連絡協議会（蘭越町・倶知安町・京極町・喜茂別町・留寿都村・真狩村長・ニセコ町）、公益財団法人河川財団・子供の水辺サポートセンター、公益財団法人日本河川協会、公益財団法人リバーフロント研究所、一般財団法人河川情報センター、一般社団法人シーニックバイウエイ支援センター、一般財団法人北海道開発技術センター、伊藤組 100 年記念基金、NPO法人自然体験活動推進協議会、寿都町漁業協同組合、尻別川漁業協同組合、NHK札幌放送局、HBC北海道放送、STV札幌放送、HTB北海道テレビ、UHB北海道文化放送、TVHテレビ北海道、ラジオニセコ、北海道新聞、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、北海道通信、北海道建設新聞

写真；尻別川源流部



絶滅危惧種イトウの産卵

第15回 川に学ぶ体験活動全国大会 in 尻別川実行委員会

【実行委員会事務局】 〒048-1522 北海道虻田郡ニセコ町字曾我 138
ニセコアウトドアセンター内
TEL 0136-44-1133
FAX 0136-44-1800

写真：早春の羊蹄山